

烏帽子会会報

2015年春号 Vol.58



Student Doctor認定式・白衣授与集合写真(H27.3.28)

- 第34回烏帽子会総会のご案内 4p
- 教授 就任 挨拶 5p
- 教授 退任 挨拶 11p
- 学会 開催 報告 15p

福岡大学医学部同窓会

目 次

・ 会長挨拶					
同窓会名簿への一考	高 木 忠 博	3		
・ 総会案内					
第 34 回烏帽子会総会のご案内		4		
・ 教授就任挨拶					
教授就任のご挨拶	安 元 佐 和	5		
教授就任の挨拶	小 玉 正 太	6		
教授就任の挨拶	鍋 島 茂 樹	7		
福岡大学医学部・精神医学教室・教授への就任によせて	川 高 弘	8		
教授就任のご挨拶	高 松 泰	9		
教授就任のご挨拶	安 永 晋一郎	10		
・ 教授退任挨拶					
退任にあたって	黒 木 政 秀	11		
教授退任のご挨拶	斉 藤 喬 雄	12		
福岡大学医学部での 37 年を振り返って	岩 崎 宏	13		
・ 各種報告					
第 9 回日本禁煙科学会学術総会報告 朔 啓二郎 / 三 浦 伸一郎		15		
第 3 回日本下肢救済・足病学会九州沖縄地方会学術集会の開催報告	竹 内 一 馬	16		
第 1 回九州髒島移植フォーラムを開催して	小 玉 正 太	17		
第 12 回九州小児泌尿器研究会開催の御報告	松 岡 弘 文	18		
第 55 回日本肺癌学会九州支部学術集会					
第 38 回日本呼吸器内視鏡学会九州支部総会 開催報告	岩 崎 昭 憲	19		
「Fukuoka-Shanghai 網膜カンフェレンス」開催報告	林 英 之	20		
第 24 回日本超音波医学会九州地方会学術集会を終えて	植 木 敏 晴	21		
・ 在外研修報告					
サンディエゴの思い出	四 元 房 典	22		
スタンフォード大学春季留学プログラムに参加して	宮 部 美 圭	24		
・ 募集要項					
在外研修援助金募集要項		25		
研究奨励賞募集要項		25		
・ 支部便り					
大分支部便り	鬼 木 寛 二	26		
・ 会員寄稿					
22 年の医師人生を振り返って	尾 石 弥 生	28		
・ 同窓会事業					
当直医パニックマニュアル第 2 版出版のご報告 / 縁結びについて 北 島 研 / 田 野 茂 樹		32		
・ 学生対策報告					
BSL へむけて	佐々木 颯 太	33		
・ キャンパス便り					
平成 26 年度 烏帽子会賞受賞者名簿		34		
烏帽子会賞を受賞して	稲 田 悠 希	34		
西医大結果報告	吉 田 圭 希	35		
福岡大学医学部同窓会 烏帽子会賞褒賞基準		35		
・ 訃 報					
檀 健二郎先生を偲んで	後 藤 英 一	36		
弔 辞	廣 瀬 伸 一	37		
豊島 潔先生を偲んで	植 木 敏 晴	38		
四宮義浩先生を悼む	竹 尾 浩 真	39		
富田祥夫先生を偲んで	津 田 恵次郎	40		
加藤清信先生を悼んで	平 塚 昌 文	41		
矢野善一郎先生を偲んで	二 田 哲 博	41		
故 日山 昇 君 (1 回生) 追悼の記 ーわが友、日山昇君を偲んでー	二 見 喜太郎	42		
・ 事務局だより		43		
・ 医局長・医長名簿		44		
・ 教育職員人事		45		
・ 編集後記		ウラ		

会長挨拶

同窓会名簿への一考

烏帽子会 会長 高木 忠 博 (1 回生 脳神経外科クリニック高木 院長)



或休日、最近不通の同級生に連絡をとつと思
い立ち、分厚くなった同窓会名簿を持ちながらこ
の本が持つ力を感じました。この名簿は43年の
時間と、この学部に係った4,737人の人間が一
冊になった本ではないかと思いました。

この同窓会名簿と云うモノは、自分の出処を
一番実感させてくれる唯一の道具であり背筋を
ピンと伸ばしてくれる道具の样にも思います。自
分が医師として福岡大学医学部で学生として教
育を受けた事実はどうしようもない一生の経歴に
なります。福岡大学医学部卒の経歴は、卒業し
た瞬間から発生し同窓生になってしまう出来事
です。同窓会名簿は、日本人であることを証明
するパスポートと同一の性格を持つのではない

かと思いました。小生は、この同窓会名簿と云う
モノは電子化でも良いのではないかと云う意見
も出ますが、この本と云う形になっている事が大
変大きな意味を持つと考えます。この福岡大学
医学部同窓会名簿が自分の書齋に立っている
事は、3,912人の同窓の仲間が、自分の後ろで
自分を守って応援してくれている事を証明し何
処かで自分を支えてくれる力に為ってくれている
様に思います。この同窓会名簿と云うのは、卒
業生である限りどの様な事が有ろうとも自分の名
前がこの名簿から消去される事は絶対に有りま
せん。自分を最後迄守ってくれる砦ではないで
しょうか。そして、宿命を自覚する源泉だと思
います。同窓会名簿は、同窓生の本棚の何処か
に本として凜として立っている事だけでその役目
を果たしている書籍と思います。ですから現在
の皆さんの情報は、変更が発生した場合必ず本
部の方へ御連絡下さい。そして、この我々の宝
物である同窓会名簿は、愛着を持って大切に扱
って頂きたいと思ひます。この同窓会名簿と云
うモノで我々卒業生は、一つに好むと好まざるに
かかわらず繋がっていると思ひます。

あつ!!この顔!!

この顔にピン!! ときたら出席!!

ピン!! とこない方も、是非ご出席ください。



アメリカンドリーム

本村 禎



メスをフォークに持ち替えて

重川 誠二

第34回 烏帽子会のご案内

今年も下記の如く烏帽子総会を開催します。

- 【日 時】平成27年7月4日(土)
- 【会 場】ソラリア西鉄ホテル8階
福岡市中央区天神2丁目24-3
TEL.092-752-5555
- 【総 会】午後5時00分
- 【講演会】午後5時45分
- 【懇親会】午後7時00分
- 【会 費】5,000円

平成7年卒のみんな、
副幹事学年の
平成17年卒のみんな

幹事だョ!
全員集合

※ご出席の返事を、巻頭綴り込みのはがきで6月20日までにお送り下さい。

教授就任挨拶

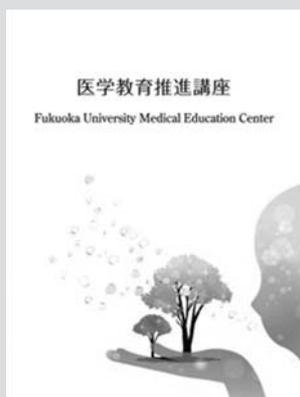
教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 医学教育推進講座 主任教授 安元 佐和 (7回生)



やすもと さわ
安元 佐和
主任教授 略歴

- 1984年 福岡大学医学部卒業
- 1994年 福岡大学医学部小児科助手
- 2005年 福岡大学医学部小児科講師
- 2011年 福岡大学医学部小児科准教授
- 2012年 福岡大学病院小児科診療教授
- 2014年10月
福岡大学医学部
医学教育推進講座
主任教授



2014年10月1日に福岡大学医学部に新しく医学教育推進講座が開設され、初代主任教授を拝命いたしました。これまで小児医療の臨床の中で学生たちや若い医師を指導してまいりましたが、もっと入学時早期から臨床医に必要なことを学生に伝えたい思いから、新しい講座に勇気を出して手を挙げました。医局は医学部情報センター4FのPC教室奥に出来ましたので、どうぞ皆様お寄り下さい。新しい教授室では、M2向けのシミュレーターや模擬患者さんとのシミュレーション学習のグループ学習、M4のOSCE前の医療面接補習などを行っています。

今、日本の医学教育が大きな変革期にあり、日本独自に行われていた医学教育から、国際的な評価基準に則した医学教育への転換が必須となりました。これから日本の医学部は、順次国際基準に基づいた分野別医学教育評価を受審し認証を受けることを目標にしています。そのためにアウトカム基盤型の医学教育カリキュラムへの改変など早急に取り組むべき課題が山積しています。新しい医学教育のモデルカリキュラムは、卒業時に知識だけではなく、基本的な診療技能、臨床推論力、患者中心の医療、チーム医療に貢献出来るコミュニケーション能力、生命倫理、地域医療、国際性などの実践力を身につけていることが到達目標になっています。現在行われているM4のCBTやOSCEに加え、5年後をめどにM6卒業前にPost Clinical Clerkship OSCEが全国共用試験として導入されます。将来的には医師国家試験でもOSCEが行われる方向です。そのためには、これまでの医学部の講義形式を刷新し、医学生が医学教育の中心になり教育者はファシリテーターとしてサポートする成人型学習が求められます。福岡大学医学部においても、教職員が一丸となり新しい医学教育への展開を進めて行く事が、福岡大学医学部生の良さを伸ばし社会に貢献できる良き臨床医を育てることに繋がっていくと確信しています。同窓会の皆様の篤いサポートに応えるべく、国試合格100%も実現させる所存です。今後ともご支援のほど、よろしく願いいたします。

教授就任の挨拶

福岡大学医学部 再生・移植医学 主任教授 小玉 正太 (13 回生)



こだま しょうた
小玉 正太
主任教授 略歴

- H 2. 3 福岡大学医学部 卒業
- H 2. 6 福岡大学病院外科学
第 1 入局
- H 6. 4 愛知県がんセンター
中央病院消化器外科
チーフ・レジデント
- H12. 3 福岡大学大学院
移植免疫学専攻 卒業
- H12.4 Harvard Medical School,
MGH Postdoctor fellow
- H15.3 Harvard Medical School,
MGH Instructor
- H17.3 Harvard Medical School,
BWH Assistant Professor
- H21.4 福岡大学医学部
再生・移植医学 准教授
- H26.10 福岡大学医学部
再生・移植医学 主任教授

平成 26 年 10 月より、再生・移植医学講座の主任教授を拝命致しました。再生・移植医学講座は平成 19 年に Translational Research 部門として基礎系講座に配置・設立され現在に至ります。

私は平成 2 年に福岡大学医学部を卒業し、外科学第 1 講座(現消化器外科)に入局後、出向先をローテーションしました。その後、愛知県がんセンターでチーフレジデントを経て、福岡大学大学院に進学し移植免疫学を専攻しました。大学院卒業後は博士研究員として、Harvard Medical School の関連施設である Massachusetts General Hospital に留学し、その後 Harvard Medical School の大学教官として採用され、気がつけば 9 年以上を米国で過ごしました。平成 21 年 4 月から学長付准教授として福岡大学に着任し、平成 24 年 4 月からは医学部講座の准教授となっています。

思い返すと我々世代の医学部卒業後教育は、秩序だったカリキュラムもなく、教室人事に沿い、臨床研修先や出向先を廻りました。しかしながら、一般外科・消化器外科をはじめ心臓血管外科・放射線科・麻酔科・救急救命センターなど多くの外科系関連科をローテーションし、そのローテーション先では指導医の方々に本気で厳しく御指導頂いた事は、今でも私にとりまして財産となっています。この頃の経験が横断診療等に関わり診療科の壁のない再生医療を志すきっかけとなったのかも知れないと感じています。

時として、打ち切り寸前の出向先でも腐ることなく、これでも教室の看板を背負い赴任しているのだと自分に言い聞かせ、たった一人残った赴任先の医局で臨床例を吟味し論文執筆を行うなど、赴任先ではその後の人生を左右する精神力を養いました。何事においても、すべからく過保護が良いとは限りません。若い先生方には今後自分の仕事の継続性にも繋がる忍耐力を、上手く学んで欲しいと考えています。

教室では再生医学や幹細胞研究をはじめ、細胞移植や血管・リンパ管新生の萌芽的テーマを中心に研究をすすめています。特に臍島再生に関しては、今までの研究の知見から、組織工学的な手法や新たな移植部位の検討により、新規の臨床試験を念頭においています。また臨床部門では細胞移植医療として重症 1 型糖尿病に対する臨床臍島移植を啓発・推進していますが、先進医療 B で施行されている臨床試験終了後は当施設の保険診療として細胞移植治療の主軸となること目指しています。この他にもリンパ管新生を促す、虚血肢の治療など新たな臨床試験を準備する分野もあり、今後は学内外で関連科との連携を一層深め、一つでも多くの臨床研究を診療の場に橋渡しして行きたいと考えています。

平成 27 年 4 月からは医学部講座に加え寄付講座が設立され、また福岡大学基盤研究所としては再生医学研究所の発足が内定し、福岡大学病院では再生医療センターの設立も準備されています。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

教授就任の挨拶

福岡大学病院 総合診療部 教授 鍋島 茂樹 (13 回生)



なべしま しげき
鍋島 茂樹
教授

- H2. 3 福岡大学医学部 卒業
- H4. 4 九州大学大学院医学系
研究科内科学専攻 入学
- H2. 6 九州大学医学部附属病院
医員 (研修医)
(総合診療部)
- H3. 6 原土井病院 医師 (内科)
- H8. 4 九州大学医学部附属病院
医員 (総合診療部)
- H9. 4 国立療養所田川新生病院
医師 (内科)
- H10.4 九州大学医学部附属病院
助手 (総合診療部)
- H14.4 九州大学医学部附属病院
講師 (総合診療部)
- H17.4 福岡大学病院 講師
(総合診療部)
- H18.4 福岡大学病院 准教授
(総合診療部)
- H18.6 福岡大学病院総合診療部
部長
- H25.4 福岡大学病院
東洋医学診療部
部長 (兼任)
- H27.4 福岡大学病院
総合診療部 教授

平成 27 年 4 月付けで総合診療部教授に就任いたしました。これまで応援していただいた方々に、深く御礼申し上げます。

福大病院に総合診療部を設立するにあたり、九大から母校の福大に戻ってきて 10 年になります。もちろん、新しい診療科を立ち上げるということで、意気揚々と赴任したのですが、そこからは苦労の連続でした。

はじめの年は、九大時代の後輩である柏木君とたった 2 人でスタートしました。当時、病院執行部からは救急医療や夜間当直を期待されていたようですが、2 人ではどうすることも出来ませんでしたので、まず内科外来で初診患者の診療に当たることにしました。また、各内科にお願いして 1 年次研修医は必ず 3 日間私たちの外来で研修してもらう機会を与えてもらいました。毎日朝から夕まで、ずっと内科外来にこもって診療していると、身体診察や問診といった古典的内科診断学の大切さがしみじみと実感され、総合診療部の「売り」はこれしかないなと思に至りました。毎夕 2 人でその日みた外来患者のレビューを行い、各科に入院させてもらった患者を「回診」に行くということが続けました。またその日診た初診患者は、全員主訴と診断を記録して忘れない様にしました。10 年経った今でもこの「毎日の外来症例カンファレンス」と「初診患者サマリ」は続いており、私たちの財産になっています。

総合診療部の転機はいくつかありますが、最初のそれは、平成 19 年に初めて鱒坂君が入局してくれたことです。出来たばかりで、吹けば飛ぶ様な小さな科に、よくも入ってくれたものだと思います。そのおかげで、その後も少数ですが入局者が続いていくこととなります。また、平成 20 年度には念願の病床を神経内科の病棟内に開設しました。インフルエンザと麻黄湯の研究をはじめたのもこの頃からです。新聞にも掲載されて話題を呼び、インフルエンザ流行時に薬局で「麻黄湯」が品切れになる現象がおき、内心快哉を叫びました。

もうひとつの転機は、急患診療部 (ACC) への参加です。当院では三次救急を扱う「救命救急センター」がありますが、二次救急に関しては告示していませんでした。病院内でも賛否両論ありましたが、しぶる医局員を説得し、ACC に参加を表明しました。ACC は確かにきついし、問題を抱えていますが、地域医療を担う若手の医師を教育する場として、今後とも必要な部門であると信じています。

大袈裟かもしれませんが、この 10 年間は総合診療部が潰されない様にと必死でやってきました。何とかここまで来られたのも、叱咤激励していただいた多くの方々のおかげです。2017 年度からは新しく「総合診療専門医」のプログラムが始動します。若い「町医者」をはぐくむ診療科として、今後も精進と成長を続けていく所存ですので、どうぞご指導ご鞭撻を宜しく申し上げます。

福岡大学医学部・精神医学教室・教授への就任によせて

福岡大学医学部 精神医学教室 主任教授 川 嵩 弘 詔 (特別会員)
福岡大学病院 精神神経科 診療部長



かわさき ひろあき
川 嵩 弘 詔
主任教授 略歴

- 1984.3 九州大学医学部卒業
- 1984.6 九州大学医学部附属病院
医員 (研修医)
(精神科神経科)
- 1991.7 マサチューセッツ工科大学
癌研究所
脳認知科学学部 留学
- 2000.1 九州大学医学部附属病院
助手 (精神科神経科)
- 2000.1 九州大学医学部附属病院
講師 (精神科神経科)
- 2007.10 九州大学病院 副科長
(精神科神経科)
- 2008.1 九州大学大学院
医学研究院
精神病態医学分野 講師
- 2008.4 九州大学大学院
医学研究院
精神病態医学分野 准教授
- 2015.4 福岡大学医学部
精神医学教室 主任教授
(福岡大学病院
精神神経科・診療部長
兼任)
現在に至る

多くの方々の助けを頂き、前任の西村良二教授の後任として、この度、福岡大学医学部・精神医学教室・教授を拝命させていただくことになりました。長い間、奉職させていただいた九州大学大学院・医学研究院・精神病態医学を辞し、福岡大学に赴任させていただく運びとなりました。

私は、1984年に九州大学医学部神経精神医学教室(中尾弘之教授)に入局し、田代信維教授、神庭重信教授と3代の教授のもとで働き、精神科医になって31年が過ぎました。1991年から1999年まで、米国ボストンのMITにて神経科学分野で研究生活を送り、帰国後2000年から九州大学病院に15年3ヶ月間勤務させていただいたこととなります。九州大学病院という日本最大の大学病院で多くの優秀な先輩、同僚、後輩とともに医療、研究、教育等の体験をさせていただきました。これは、私の人生の中でも貴重な時間であり、現在の私の有り様をかたちづくってくれています。

福岡大学医学部精神医学教室は初代教授が西園昌久教授、2代目が西村良二教授であり、私が3代目として伝統の維持と今後の発展を担うことになり、大変身の引き締まる思いです。

福大病院は、九大病院とともに福岡市にある二つの大学病院、特定機能病院であり、昨年福大にも、市の認知症疾患医療センターが開設されました。初代の西園教授が九大出身であり、九大とは深い関係があります。特定機能病院の精神科医療および認知症疾患医療センターの診療を通じ、より緊密な連携を図りながら地域医療に貢献していきたいと思っています。

当教室は、各人が興味関心を持つことを対象として研究しようという意欲が漲っています。研究、教育、臨床に目が向いている才気煥発な若い人々が多く集い、堅実な医局運営のもと、自由で多様な研究グループがある素晴らしい医局です。

本年4月1日に赴任して、七隈の空気の綺麗さと空の大きさに感服しています。玄界灘からの風が、樹木の豊かな背振山系の油山にあたり、森の空気をはこんでくれます。学内には多くの樹木が植えられ、ツツジが綺麗に咲いています。

今後は、多様な専門性を併せ持つ精神科医を育みながら、前向きに進んで行きたいと思っています。今後ともよろしく願い申しあげます。

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 腫瘍・血液・感染症内科学 主任教授 高松 泰 (特別会員)



たかまつ やすし
高松 泰
主任教授 略歴

- 1987.3 九州大学医学部 卒業
- 1987.6 九州大学医学部第一内科
研修医
- 1988.6 県立宮崎病院内科研修医
- 1989.6 九州大学医学部第一内科
研究生
- 1991.4 九州大学医学部付属病院
輸血部／第一内科 医員
- 1993.4 県立宮崎病院内科
副医長
- 1996.4 ハンソン癌研究所
リサーチフェロー
(オーストラリア)
- 1999.4 福岡大学病院内科学 第一
助手
- 2006.4 福岡大学病院
血液・糖尿病科 講師
- 2008.10 福岡大学医学部
腫瘍・血液・感染症内科
准教授
- 2014.4 福岡大学病院
腫瘍センター長
- 2015.4 福岡大学医学部
腫瘍・血液・感染症内科
主任教授

腫瘍・血液・感染症内科学の教授に就任しました高松です。1987年に九州大学医学部を卒業した後、九州大学で臨床および研究を5年間、県立宮崎病院で臨床を4年間、オーストラリアのハンソン癌研究所で研究を3年間行いました。1999年に帰国した際に福岡大学病院に赴任し、その後16年間福岡大学で診療、研究、教育に務めて来ました。

医学教育では、M3、M4の臨床腫瘍学、血液内科学、感染症学の講義を担当しています。M5、M6のベッドサイド・クラークシップ教育では、病態を考えながら病歴聴取、全身の診察を行い、問題点を整理した上で診断に必要な検査および治療の計画を立てる問題志向型システムに基づいた臨床教育を実施しています。学生は副担当医として患者の治療、処置に参加し、インフォームドコンセントにも同席することで、実践的な臨床力を養うことを目指しています。

診療では、臓器横断的に固形がん、血液疾患、感染症に対する薬物療法を実施しています。がん薬物療法の専門家として有効かつ安全に抗がん薬を使いこなすとともに、外科、放射線科と協力して集学的治療を実践することで、がん患者の治療あるいは生存率の向上を目指しています。また、がんに伴う症状や治療の副作用など身体的な苦痛に加えて、がん患者が抱える精神的・社会的な苦痛にも配慮した緩和医療を多職種で協力して行っています。感染症に関しては、様々な疾患で治療の高度化、患者の高齢化が進み、そのため免疫力が低下して感染症を合併する患者が増加しています。病院内で発生した重症感染症患者の治療に介入し、感染症コントロールに務めています。

研究では、がん薬物療法の成績向上を目指して多施設共同臨床試験を精力的に計画・実施しています。治療に伴う感染症や悪心・嘔吐など合併症に対する支持療法の研究にも力を入れています。今後の目標はがんや感染症に対する予防医学を発展させることで、市民に対する啓蒙活動も進めていきます。

今後も福岡大学の医学教育をさらに充実させ、地域がん診療連携拠点病院である福岡大学病院のがん診療の質を向上させるべく全力を注ぐ所存です。

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 生化学講座 主任教授 安 永 晋一郎 (特別会員)



やすながしんいちろう
安永晋一郎
主任教授 略歴

- S59 九州大学医学部入学
- H 2 同上卒業、医籍登録
九州大学医学部附属病院
内科研修医
- H 3 北九州市立医療センター
内科研修医
- H 4 九州大学大学院医学系研究科
内科系専攻
(九州大学生体防御医学研究所
遺伝学部門)
- H 8 同上修了、学位取得
済生会唐津病院 内科医師
- H 9 パスツール研究所 (パリ)
博士研究員
- H11 国立小倉病院 内科医師
- H13 佐賀医科大学
分子医化学分野 助手
- H15 広島大学
原爆放射線医科学研究所
幹細胞機能学研究分野 助手
- H19 同上 助教
- H23 同上 准教授
- H27 福岡大学医学部生化学講座
主任教授
現在に至る

本年4月1日より黒木政秀先生の後任として生化学講座の三代目主任教授を拝命しました安永晋一郎と申します。早速、医学科学生に対して講義・研究室配属を始めましたが、その責任の重さを痛感しています。

私は、北九州市で生まれ育ち久留米大学附設高校を経て九州大学医学部に進学しました。そして卒業後、九大病院・北九州市立医療センターにて内科臨床研修を行いました。この研修医の時期に持った「患者さんはどうしてこのような病態を示すのだろうか？どうしたらそれを良い方向に持っていけるのだろうか？」という問いが、その後の臨床医・基礎医学研究者としての自分を規定したのではないかと思います。研修終了後、九州大学生体防御医学研究所の笹月健彦先生・木村彰方先生のもとでHLA遺伝子多型と疾患感受性や臓器移植片拒絶の研究を行い、学位を取得しました。その後、パリにありますパスツール研究所に2年半留学し、遺伝性聴覚障害の原因遺伝子を同定する仕事を行いました(言葉も通じない異文化の中で生活をし、仕事をしたということは、私の人生観に革命的な変化をもたらしたように思います)。また留学の前後は、九大病院や2ヶ所の地域中核病院で膠原病内科医としての修練を行いました。実はこの時期に後輩の医師を(おこがましいですが)指導する楽しみにも目覚めました。その後、思い立ちまして基礎医学の道に進み、佐賀医科大学分子医化学講座(出原賢治先生)でアレルギー疾患の成因に関する研究を、広島大学原爆放射線医科学研究所(瀧原義宏先生)で幹細胞制御の分子機構の研究を行いました。研究テーマは変遷していますが、研修医の時に持った問いをジェネティクス・エピジェネティクスという観点から追求していったという点で一貫しています。一方で、平成23年には広島大学緊急被ばく医療チームの一員として福島県に派遣され避難者の一時帰宅事業をお手伝いして、社会の問題に対しても医師として科学的に思考することの必要性を強く感じました。

ご縁がありまして本職に就くことになりました。生化学が生化学で完結するのではなく、生化学と他の基礎医学、また臨床医学との垣根を取り払った統合医学を教示することにより“よきMDを育成すること”に全力を尽くしたいと考えています。よろしく申し上げます。

教授退任挨拶

退任にあたって

福岡大学 名誉教授 黒木政秀 (前福岡大学医学部 生化学 主任教授・特別会員)



平成 27 年 3 月末日を以て選択定年制を利用し退職しました。昭和 53 年 4 月に助手 (現在の助教) として赴任してから本学での 37 年間 (助手 5 年、助教 11 年、教授 21 年)、学生会員をは

じめ同窓会の皆さまには本当にお世話になりました。ありがとうございました。

赴任当初は、2 年ほど医学の基本的な研究技術を身につけ、母校である熊本大学の内科に戻って研究を続けるつもりでしたが、基礎の研究に取りつかれ、そのままになってしまいました。この間、生化学講座の初代教授である松岡雄治先生のご指導の下、CEA と略される腫瘍マーカー (腫瘍関連抗原) を研究対象として、癌の診断法の改良に取り組みました。その結果、現在国際的にも広く臨床応用されている測定キットを本学で開発できたことは大きな誇りになっています。近年は、その他 EpCAM と呼ばれる腫瘍関連抗原も研究対象とし、新たな癌の治療法の開発に挑んできました。CEA や EpCAM に対するヒトモノクローナル抗体の開発に成功し、それを使って癌の遺伝子療法、超音波療法、近赤外線療法、ウイルス療法などに改良を加え、多くの国際的な共同研究も進めてきました。今ようやく国外での臨床試験が始まろうとしており、こちらはその成果に期待しながら静かに見守りたいと思います。

教育に関しては、過去に日本医事新報でも紹介したことがあります。百姓の父が第二次世界大戦時に台湾で 6 年間衛生兵を務め、戦後無医村の田舎で無償の代替医師をしていた姿が原点にあります。私自身、医学部を卒業してまもなく、6 年間机上の医学のみであった自分と、恐らくは 6 年間、理論抜きの

実践医学中心であったろう父を比較して愕然としました。同じ 6 年間で過ごしたといえながら、いざ田舎に帰って医者をしようにも、その医療技術は皆無であり、当時の父の足下にも及ばないことを実感したからです。以来、日本の医学教育は間違っていると叫びつづけてきました。本学にきて間もないころ始まった 3 年生の医学概論演習 (現在の基礎研究室配属) の中で、私が担当する学生さんたちには、私も含め毎年必ずお互いの静脈採血を繰り返し経験させていた大きな理由の一つです。

医師免許を持たない学生に対して医療行為を体験させる必要性和危険性、その問題を克服できなかった日本の医学教育界に、今“黒船”と揶揄される要求が突きつけられています。2010 年 9 月、米国の海外医学部卒業生教育委員会 (ECFMG) が声明を出しました。ECFMG は米国での臨床研修を希望する海外医学部卒業生に許可を出す組織ですが、その声明内容は「2023 年以降、米国医学教育連絡委員会 (LCME) や世界医学教育連盟 (WFME) と同等の基準で認証評価を受けた医学部の卒業生のみが米国での臨床研修を申請できる」というものでした。当初は「米国での臨床研修の意義は低下したとか米国への臨床研修者は減っているので無視してもよい」というような空気もありました。しかし、米国が求める医学教育とは、「医師国家試験に合格した時点で基本的医療行為ができる医師を育てる教育であり、これまで日本でもその必要性が叫ばれてきた問題の指摘に過ぎない」ということが改めて理解されました。その結果、全国医学部長病院長会議や日本医学教育学会を中心に医学教育の認証評価システムの構築が叫ばれています。具体的には、医学教育期間 (日本では 6 年) の少なくとも 3 分の 1 (2 年間) は実習に当てるべきというのが基盤となった提案であり、昨今とくに臨床実習の充実と前倒しが叫ばれはじめたのは皆さんご存じのとおりです。1853 年ペリーによる本物の黒船の来航以来、良いにつけ悪いにつけ、日本では何事も外

圧によってしか改革がなかなか進んでこなかったというのは、斯界でも同じことなのです。

しかし、臨床実習を増やすカリキュラムはできて、その教育に携わるマンパワーを含めた体制が伴わなければ、その成果は伴いません。大学の医学部および病院においてその屋台骨を支えるべきは、改めて言うまでもなく、その大学の出身者です。また、歴史が浅く関連病院が少ない福岡大学医学部では、

大小を問わず、卒業生の皆さんがすでに活躍されている学外の関連病院との連携がこれまで以上に不可欠です。今ほど教育環境の整備に福岡大学の卒業生の皆さんの力が必要とされ試されている時はありません。学内においても学外においても、とくに若い世代の烏帽子会の皆さんの意欲と実力と実行力を伴った協力によって、福岡大学医学部が益々発展していくことを心から祈っております。

教授退任のご挨拶

福岡大学 名誉教授 齊藤 喬雄 (前福岡大学医学部 腎臓・膠原病内科学 主任教授・特別会員)
特定医療法人社団 三光会 三光クリニック 院長



今年3月末をもちまして、福岡大学医学部教授を退任致しました。平成12年4月に当時の内科学第四講座主任教授として着任以来、烏帽子会会員の皆様にはひとかたならずお世話になり、厚く御礼申し

上げます。

私は、昭和46年に東北大学を卒業してから、現在までの44年の大半を大学で生活しました。前半の2/3を母校の東北大学で、後半の1/3を福岡大学で過ごしましたが、教授としての福岡大学での生活により重みを感じております。福岡大学では、制度改革により平成19年度からは腎臓・膠原病内科学主任教授となり、平成24年から3年間は総合医学研究センターで仕事をさせていただきました。この間、教育、診療、研究のそれぞれについて十分責任を果せたか否かは、皆様のご判断にお任せいたしますが、私自身は充実した15年を過ごしたように思います。役員としては医療安全担当の副病院長や最後の看護専門学校長を務め、それぞれにも大きな思い出があります。しかし、烏帽子会との関連からいえば、学年の主担任として多くの学生と触れ合い、大学教師として実感を持ったことが強く印象に残っております。この頃から始まった大学間共用試験(いわゆるCBT)の対

策のために、4学年時には志賀島でCBTキャンプを行いました(写真)、親睦のよい機会でした。ただ、遊泳禁止の海で夜中に泳いだ学生がおり、大変困ったことを思い出します。まあ、学生にありがちな羽目を外した行為で、事故に至らなかったのは幸いでした。成績の向上には私なりにいろいろ努力したつもりでしたが、担任の学年が医師国家試験で全国最下位だったのは、何とも残念な結果でした。今では、そのような学生が皆立派な医師になっており、嬉しく思っております。

最後に私から会員の皆様の一つお願いがあります。大学は教育機関であり、医学部では良い医師を作ることが最大の目的かと思えます。これに対して、最近の国の政策上、研究に関してはいわゆる旧帝大を中心とする国立大学に重点を置き、私立大学についてはあまり期待していないようにみえます。しかし、研究の発展は学問を深める上で不可欠なものであり、大学としての存在意義に関わります。現に福岡大学でも、世界的な水準で行われている研究が少なくありませんし、私自身福岡に参りまして、福大出身の教授との連携で研究を大きく発展させることができました。医学研究は頭脳だけで解決できるものではなく、むしろ日常の医療から研究の動機を見出し、その研究を粘り強く進めようとする努力が必要だと思います。その意味において、どの大学でも研究に関わる条件は均等ではないでしょうか。学生や若い会員の先生方には研究に興味を持っていただき、素晴らしい成果を上げて、福岡大学の存在を広く知らしめることを願

胞肉腫など、多くの軟部腫瘍について遺伝子解析がなされ、軟部腫瘍は単純な特異的異常を示す群と複雑な非特異的異常を示す群の2つに大別されることが分りました。軟部腫瘍は発生頻度が少ない上に種類が多く、しばしば病理診断は困難ですが、組織形態のパターン分析と遺伝子検索を組み合わせることによって、正確な診断を下すことができるようになりました。この研究に関して、私は第97回日本病理学会総会で宿題報告を行い、日本病理学会賞を授与されました。最近では肉腫の発生起源と分化について研究し、自見至郎講師と鍋島一樹教授の協力で、GFP発現マウスの骨髄細胞移植と発癌実験によって、軟部肉腫の起源には局所の間葉系細胞由来のものと同様に骨髄幹細胞由来の2つの経路があることを示しました。また、脂肪肉腫において、腫瘍細胞の分化を検討し、脂肪腫様の分化を示す高分化粘液型脂肪肉腫の存在を証明しました。

平成14年に、竹林茂夫教授(病理学第二)の退任に伴い、病理学第一講座と第二講座が統合されて、一つの病理学講座となりました。二つの旧講座にはそれぞれの歴史と伝統があり、研究分野も全く異なっていましたので、統合はかなりの難事業でしたが、竹下盛重教授、坂田則行教授をはじめとして、教室員各位が「小異を捨てて大同に就く」の精神で協力してくれたお陰で、非常に助かりました。講座の統合で最も期待された点は、病院病理部における病理診断のレベルアップと精度管理でしたが、この点に関してはかなりの改善が得られたと確信しています。また、卒後研修と大学院教育についても、講座統合によって、多くの専門家から広い視野で指導が受けられるようになり、若手研究者の育成に益すること大でした。旧第一病理学の腫瘍病理を中心とする人体病理学と旧第二病理学の腎、血管病理学のそれぞれのエキスパートが分担して診断業務と卒後研修の指導を行うことが出来、病理診断の質が向上し、セカンドオピニオンを得ることも容易になりました。竹下盛重教授(血液・リンパ網内系疾患)、鍋島一樹教授(呼吸器、乳腺、神経疾患)、坂田則行教授(心・血管疾患)久野准教授(腎疾患)、溝口幹朗講師(前立腺癌)、二村聡講師(消化管腫瘍)、濱田義浩講師(膵腫瘍)、濱崎慎講師(肺腫瘍)がそれぞれの分野で腕を振ってくれました。私はその後、総合医学研究セ

ンターに移籍となりましたが、後任の正教授として鍋島一樹教授が就任しました。今後も病理学講座と病理部が竹下教授と鍋島教授の協力の下に益々発展することを期待しています。

平成17年～19年の医学部長在職中は、呼吸器内科学、形成外科学および再生移植医学の3講座を新設するとともに、外科学を統合し、医学部・病院の研究・診療体制の充実をめざしました。看護学科の設置は既定の事業でしたが、教員の選考等で色々な問題が次々と起こり、非常に難航しました。苦勞の甲斐あって、何とか予定通りに開設することができたものの、医学科と看護学科の医学教育や研究に対する認識の違いは大きく、共同で医学部を運営するには我慢強い努力が必要でした。将来的には看護学科を中心とした新しい学部を創設するのが福大の発展のためには良いのではないかと考えています。

医師国家試験の成績向上は私学の医学部には極めて重要な課題ですが、国試合格率は長い間低迷していました。私は医学部長として合格率を向上させることを至上命令と考え、カリキュラムの改善など種々の方策を講じました。そして、同窓会長の高木忠博先生の絶大な協力を得て、国試合格率100%を目標として、国試対策を大幅に強化するとともに、医学生の意識改革を行い、モチベーションを向上させました。その甲斐あって、合格率は一時的にかなり改善しましたが、その結果に安心したためか、学内に再び弛緩したムードが漂い、継続的な好成績を維持することができず、残念でした。しかし、現在の朔啓二郎医学部長の時代になって、再び国試対策に熱心に取り組み、合格率が上昇傾向にあることは喜ばしいことです。今後も気を緩めることなく、合格率100%を達成するようがんばって頂きたいと存じます。

福岡大学での37年間を振り返ってみますと、困難な状況も数多くありましたが、それ以上に多くの先輩・同僚、事務職員、技術職員の方々のご指導とご支援、そして教室員諸君のご協力によって、難局を乗り切ることができ、大過なく停年を迎え、大変感謝しています。

末筆ながら福岡大学医学部・病院と同窓会の益々のご発展ならびに会員の皆様のご健勝を心よりお祈りいたします。

各種報告

第9回日本禁煙科学会学術総会報告

福岡大学医学部長・医学部心臓・血管内科学 主任教授 朔 啓二郎 (1回生)

福岡大学病院循環器内科 診療教授 三 浦 伸一郎 (11回生)

この度、第9回日本禁煙科学会学術総会(平成26年10月25-26日、福岡大学メディカルホール)の開催に際しまして、烏帽子会の皆様には多大なるご支援を賜り有り難うございました。無事に学術総会を終了することができましたので、ご報告申し上げます。

禁煙は、様々な生活習慣病の予防とともに虚血性心疾患、脳卒中、肺疾患、末梢動脈疾患、心不全など全身の血管病イベント発症抑制に関してその重要性が益々高まっていることはご承知の通りです。この会は、日本禁煙科学会の要請により毎年開催されております学術総会です。今年の総会のテーマは、「走りぬけ!禁煙への新たな挑戦へ」と題し、禁煙を科学し支援する医学に関して、特別講演、シンポジウム、教育講演、一般演題、公開講座が実施され、活発な討議がなされました。また、医師のみでなく、歯科医師、薬剤師、保健師、看護師、心理士など多職種の方々が多く参加されました。メインシンポジウムでは、「大学入学者は非喫煙をモットーに!条件に!」と題して、「心血管病発症予防をめざした若年からの非喫煙のすすめ」、「環境整備・教育・禁煙支援による学生喫煙率の低下」、「崇城大学薬学部での禁煙化の取り組みと課題」、「タバコのない国への到達シナリオ

から見た学生非喫煙」、「禁煙推進学術ネットワークの取り組み」について発表がなされました。教育講演では、「総合的なたばこ対策の推進に向けて」、「喫煙関連肺疾患」、「健康管理、労務管理、リスク管理から考える喫煙対策」の3題が行われました。また、分科会提供セッションでは、健康心理学分科会、健康教育分科会、小児・教育分科会、ナース分科会、禁煙マラソン分科会などで活発な議論がなされ、禁煙・非喫煙に向けて共通の認識を共有できたと思います。さらに、禁煙・非喫煙は、一般の方々への啓蒙活動も重要で有り、学術総会の最後には、「命の大切さを考える ～再び… Windy in 福大病院～」と題し、市民公開講座も開催しました。「喫煙と口腔疾患」や「2020年東京オリンピックと非喫煙」について、聴講していただき、Windyの公演で楽しんでいただき、全ての学術総会のスケジュールを終えました。

本学術総会の開催に際しては、多くの方々からご指導、ご鞭撻をいただきまして誠に有り難うございました。心臓・血管内科学医局員一同、感謝いたします。最後に今後の福岡大学医学部同窓会の益々の発展を祈念しまして、以上ご報告とさせていただきます。



市民公開講座「再び…! Windy in 福大病院」

第3回日本下肢救済・ 足病学会九州沖縄地方会学術集会の開催報告

社会医療法人喜悦会 那珂川病院 血管外科

NPO 法人足もと健康サポートねっと 代表 竹内 一馬 (20 回生)

この度、平成 26 年 10 月 11-12 日に福岡市内の「JR 博多シティ JR 九州ホール」において第 3 回日本下肢救済・足病学会九州沖縄地方会学術集会ならびに市民公開講座を主催させていただきました。学術集会は 423 名の参加(関係者を含むと約 550 名の参加)、市民公開講座は延べ 1300 人を超える一般市民の来場があり、盛会で終えることができましたので、ここにご報告させていただきます。

まず学会のことを簡単に紹介したいと思います。本学会は糖尿病や下肢血流障害などが原因による壊疽や下肢切断の救済・回避・治療とそれらに関わる問題を積極的に取り上げる場として平成 21 年 5 月に設立されたまだ若い学会です。単一診療科の医師だけでなく、足に関わる糖尿病科、循環器科、血管外科、形成外科、整形外科、皮膚科、腎臓内科(透析科)、リハビリテーション科、看護師、義肢装具士、理学療法士、靴屋などの多くの診療科・職種が参加しているのが特徴です。九州・沖縄地方会は北海道について 2 番目に発足した地方会で今回が第 3 回目を迎えました。

準備から当日まで(終了後も)、当院の理事長、院長、事務スタッフ、院内フットケアチーム、NPO 法人足もと健康サポートねっとのメンバーをはじめ、学会事務局である上村哲司先生(佐賀大学形成外科診療教授)、九州各地区のフットケア指導士などにお支えいただけましたことを有り難く思います。本大会が九州・沖縄地区における下肢救済医療の発展に貢献し、医療従事者のみならず、足に関わるさまざまな業種に対しても知識・技術の普及・促進に繋がり、各医療機関などの連携が広がるきっかけになればと切に願っております。

超高齢化社会の中、足(脚)にトラブルをもった方は今後も増えることが予想され、国として地域として対応していくことが急務です。福岡大学医学部の同窓生として、福岡市のみならず九州地区の市民に微力ながら貢献することができました。これらのことを喜びにそして糧として、今後も頑張っていきたいと思えます。

福岡大学医学部 心臓血管外科(田代忠教授)、心臓血管内科(朔啓二郎医学部長)、医学部同窓会には多大なるご協力をいただき感謝の気持ちで一杯です。ご支援どうもありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。



学会市民公開講座をお手伝いいただいた約 50 名物看護師(フットケア指導士)、義肢装具士、靴店、フットセラピスト、健康運動指導士、事務職などのスタッフ集合写真

第1回九州膵島移植フォーラムを開催して

福岡大学医学部 再生・移植医学 主任教授 小玉 正太 (13 回生)

この度、第1回九州膵島移植フォーラムを福大メディカルホールにて平成27年1月10日(土)に開催致しました。今回の開催にあたり、福岡大学医学部同窓会より多大なるご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。また今回は初めてのフォーラム開催にもかかわらず、盛会のうちに終えることができましたことを報告させていただきます。

重症1型糖尿病患者を対象として、臨床膵島移植は2000年から欧米を中心に行われ、国内でも2004年から開始されました。しかし2007年に膵島細胞を単離する際に使用する消化酵素にBSE(狂牛病)の病原体であるプリオンの混入が懸念された為、2012年に至るまで国内では施行を中断するという、誠に残念な経過をたどっています。さらに、2012年から膵島移植が再開されましたが、本治療法は臓器移植法に規定されたネットワークに沿う移植医療であるにもかかわらず、本年11月からは最も制約の厳しい「第一種再生医療技術」の細胞治療として再生医療安全確保法により規定される事となりました。これは法律からも二重に制約を受けるものとなり、膵島移植を進める者や移植を受ける者にとりまして、向かい風となっています。

臨床膵島移植を行います福岡大学病院は、先進

医療Bを推進する全国6認定施設として、長崎を除く九州地区を担当します。昨年、東京でレシピエント・プールの拡大及び膵島移植啓発活動を行いました。残念ながら福岡でのレシピエント・プールの拡大には繋がりませんでした。そのため今回患者団体である日本IDDMネットワークの共催と福岡県糖尿病協会の後援を得て移植登録患者の拡大を目指しフォーラムを開催しました。通常の市民公開と異なり主に1型糖尿病患者さん及びその家族を今回対象としています。演者は移植施行医のみでなく、膵島移植を受けた患者さんやスポーツを行いながら病気を克服する患者さんにもお話をいただきました。さらにフォーラムでは来場いただきました患者さんやそのご家族と演者によるトークセッションや、miniサイエンスカフェでのマンツーマンの対話に時間を十分に取ることができました。実際使用する細胞単離の器具の解説や閲覧をはじめ、混合費用で行われる移植費用の説明、移植適応に関するセカンドオピニオンも行き、好評を得ていました。

最後にフォーラムを開催するにあたり、当院糖尿病内科の野見山先生に司会をお願いしました。移植登録医も兼ねておられます先生にお礼申し上げます。



開催メンバー・演者とフォーラムを終えて



miniサイエンスカフェで患者さんとの対話の様子

第12回九州小児泌尿器研究会開催の御報告

福岡大学医学部 泌尿器科学 准教授
九州小児泌尿器研究会 事務局 松岡弘文 (8回生)



この度は、上記研究会の開催に当たりまして、ご後援を賜り誠にありがとうございました。

泌尿器科は高齢者の多い科と思われがちですが、先天異常の多い領域でもあるため、小児泌尿器科部門は大きな柱の1つです。

しかし泌尿器科の中でもやや異質であるためか必ずしも全ての泌尿器科医が熱心に取り組んでいるとは限らないのが現状です。このような状況に鑑み、九州全体の小児泌尿器科のレベルを引き上げるべく、立ち上げられたのが本研究会です。小児科との連携を図るべく、多くの小児科の先生にもご参加いただけるように研究会名を「小児泌尿器」とし、「科」をつけてはおりません。

一定の年齢以上の烏帽子会員の先生方はご存じのように、初代泌尿器科坂本公孝教授と大島一寛先生(福大入職時助手、退職時教授)がこの領域を熱心にやっていた事から、現在も代表世話人は当科の田中正利教授に引き継ぎ、事務局を福岡大学に置いて、私とその任に当たっています。これまで偶数

回を全て福岡大学で開催してきましたが、次回以降九州一円の大学で順繰り開催していくことが決まりました。今後ますます小児泌尿器科が九州でも盛んになっていくことが期待できそうです。

今回の第12回は、小児科から2題、泌尿器科から12題の合計14題、それに順天堂大学小児科の大夫義之先生をお招きして特別講演を1題という構成に致しました。一般演題は必ずしも多くはありませんが、十分な時間をとって活発な討論を行うのが本研究会の持ち味です。今回もややこじんまりした会場ながら熱く盛り上がりました。会場はその年の事情により、専用ホールを借りたり、製薬メーカーの支店のホールを借用したり、あるいは福大メディカルホールで行ったりと、兎に角どんな形であれ、まず開催できることを基本に行って参りました。今回はセントラザ博多に会場を借りることができたため、九州一円の参加者には交通の便も良く好評でした。

泌尿器科の領域も癌や排尿障害、泌尿器内視鏡(含ロボット)等には多くの研究費が動き、学会・研究会でも寄付がよく集まります。一方、「小児」の領域は毎回寄付や後援を付けるのに苦慮しております。今回のご後援金は非常にありがたく、本研究会がスムーズに運営できる一助になったものと考えております。ここに心より御礼申し上げます。



順天堂大学小児科の大夫義之先生



第55回日本肺癌学会九州支部学術集会、 第38回日本呼吸器内視鏡学会九州支部総会 開催報告

福岡大学医学部 呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学 主任教授 岩崎 昭 憲 (5 回生)

平成 27 年 2 月 27 日(金)～28 日(土)の 2 日間、福岡市の電気ビル共創館 みらいホールにおいて第 55 回日本肺癌学会九州支部学術集会、第 38 回日本呼吸器内視鏡学会九州支部総会を開催いたしました。二学会合同開催である本学会は、多くの科に関連する学会として位置づけられます。二日間、天候にも恵まれ、会場は福岡中心部である天神からのアクセスが良かったため、参加者の方々には喜んで頂き、総参加者数は 233 名と、例年を上回る方々にご参加頂きました。

学術集会のテーマを「研究と経験に基づく肺癌治療」とし、新規抗癌剤や分子標的薬、放射線治療、病理診断などの最新の治療や検査に関する講演やシンポジウムを開催しました。いずれも基礎的な研究結果から、実臨床に直結する内容まで、幅広く分かりやすいご講演を頂きました。学内からも教育講演に病理学教授 鍋島 一樹先生、ランチョンセミ

ナーに呼吸器内科講師 内野 順治先生にご講演頂き、感謝いたします。

特別講演では、2017 年世界肺癌学会会長である浅村 久尚先生(慶応義塾大学呼吸器外科教授)に「世界の肺癌に関する最新情報について」、大藤 剛宏先生(岡山大学呼吸器・乳腺内分泌外科)に「自家肺移植技術を用いた肺癌手術」という表題で、ご講演を頂きました。内容は、とてもグローバルで内容深く、出席者にも大変好評でありました。

一般演題も、内科、外科、放射線科、病理などの領域から、計 85 演題の発表があり、会場は二会場で行われ、それぞれ活発な討議が行われていました。

総じて学会全体を通して、成功裡に無事終了することができ、これも多方面からのご支援とご協力の賜物と考えております。最後になりましたが、今回の学会開催にあたり、ご寄付を頂いた福岡大学医学部同窓会に感謝いたします。



「Fukuoka-Shanghai 網膜カンファレンス」開催報告

福岡大学医学部 眼科学教室 教授 林 英之 (1回生)



この度、アクロス福岡において福岡大学医学部眼科学教室 林 英之主催で2015年3月19日に開催いたしました「Fukuoka-Shanghai 網膜カンファレンス」つきまして、烏帽子会会員の皆様には多大なるご支援を賜りまして誠にありがとうございました。心より深く感謝を申し上げます。

この学会は、予てより交流があります上海交通大学附属新華病院教授 趙培泉先生を特別講演演者としてお招きし「未熟児網膜症治療」についての講演会として開催しました。

まず、福岡大学医学部眼科学教室教授の内尾英一先生の開会の挨拶からはじまり、かとう眼科医院院長 加藤 整先生の座長でクリニカルカンファレンス-「未熟児網膜症- 福大病院における最近の治療」



についての講演を福岡大学眼科学教室の塚原朋子先生が行いました。

次に福岡大学名誉教授大島健司先生の座長で、上海交通大学附属新華病院教授 趙培泉先生に

「My career as a vitreoretinal surgeon - from Fukuoka to Shanghai」についての特別講演をしていただきました。

趙培泉教授は、1996年から2年間で当時の主任教授大島健司先生の指導のもと、福岡大学医学部眼科学教室にて研修をされました。中でも硝子体治療や当時、中国において特に治療が困難な症例であった未熟児網膜症診療における知識・手技を修練され上海に帰国されました。

趙先生のお話は、福岡大学眼科にて2年間の研修を終えた後、上海に帰国され日本で学んだ知識・手技が上海における未熟児網膜症の診療・治療に大きく貢献し、現在の医療向上にどのように役に立っているのかを実際の症例をあげ、更に手術ビデオを供覧されて説明されました。誠に失礼ながら、上海に帰国されて手術を始められたときは見違えるばかりの流麗な手術で、中国にとどまらず世界の第一線級といえる手技を見せられ、また講演の内容からも、すでに押しも押されもせぬ重鎮になられたことが痛感されました。まさに出藍の誉れであり、その全ては帰国されてからの御本人の精進努力によるものですが、若き日の趙教授を医局や病棟、外来、手術室、研究室で指導した同門の皆からすると感無量の講演でした。特に講演の最後に「自分の原点は福岡にあり、上海でも多くの業績を残しているが、自分にとって最も心に残っているのは福岡大学での論文である。」と述べられて皆を感動させられました。

最後になりましたが、本学会を開催するに当たりご尽力をいただきました福岡大学医学部眼科学教室の教室員一同、福岡大学医学部同門会会員の皆様には心より御礼を申し上げますとともに、烏帽子会の益々のご発展をお祈り申し上げます。



第24回日本超音波医学会九州地方会学術集会を終えて

第24回日本超音波医学会九州地方会学術集会会長

福岡大学筑紫病院 消化器内科 准教授 植木 敏 晴 (8回生)

第24回日本超音波医学会九州地方会学術集会が開催に、そして無事に終了したことを心より感謝申し上げます。

本学会は、恩師、坂口正剛先生が平成3年の第1回学術集会を福岡市で開催して以来、門下生として23年振りの開催でした。本学会の成功は、松井敏幸教授を始め、福岡大学筑紫病院消化器内科の先生方、日本超音波医学会九州地方会事務局の関係者の方々のご尽力とご協力の賜物と思います。学会運営を支えてくれた肝胆膵グループの先生方、消化管グループの若手の先生方と事務局や医局秘書の方々に厚く御礼申し上げます。そして何より福岡大学医学部同窓会、筑紫病院消化器内科同門会や関連病院の先生方の力添えとご協力に心より感謝申し上げます。

本学術集会は、九州・沖縄地区における超音波医学に関する学理および技術の研究を通じて学術の発展に寄与することを目的とし、消化器、循環器を始め、あらゆる領域の内科・外科系の先生方、臨床検査技師の方々が参加される学会です。第24回は、平成26年9月24日の日曜日に福岡国際会議場で、3つの会場で開催させて頂きました。応募演題は87題と過去最高の演題数で、天候にも恵まれ、多くの先生方、臨床検査技師の方々に参加して頂きました。最終参加人数も846名と過去最高でした。

プログラムは、招待講演を日本超音波医学会理事長である近畿大学消化器内科の工藤正俊教授に、循環器領域の特別講演を、和歌山県立医科大学循環器内科の赤阪隆史教授に、消化器領域を名古屋大学光学医学診療部の廣岡芳樹准教授に、また講習会の教育講演を

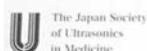
鹿児島大学医学部保健学科の木佐貫彰教授と神戸大学消化器内科岡部純弘准教授にお願いしました。

一般演題の座長は、福岡大学筑紫病院・福岡大学病院関連の消化器内科、循環器内科、眼科など多くの先生方をお願いしました。先生方のご協力で活発な討論が行われていました。会員にとって大変有意義であったと思います。実技講習会では、臨床検査技師を対象とした各領域のハンズオンセミナーも大盛況で、多くの検査技師の方々に参加して頂きました。

福岡大学筑紫病院のモットーは、「患者さんにやさしい医療」です。超音波は、医師と臨床検査技師が十分な連携を図り、患者さんにやさしい医療を提供できる非侵襲的なモダリティです。本学術集会で多くの皆様に新しい知見や工夫などを得て、日常診療や研究に役立てて頂けたのではないのでしょうか。

私は、これからも超音波と内視鏡を中心に臨床、教育と研究に邁進して行きます。今後とも何卒、宜しくお願い申し上げます。

最後に、福岡大学医学部同窓会、筑紫病院同門会および関連病院の先生方、他関係者の皆様、ご協力、ご支援、誠にありがとうございました。



日本超音波医学会 第24回九州地方会学術集会



第24回日本超音波医学会九州地方会学術集会

サンディエゴの思い出

福岡大学医学部 産婦人科学 講師 四元 房 典 (準会員)

福岡大学医学部同窓会よりご支援いただき、2012年11月から2014年10月まで2年間、米国カリフォルニア州にありますサンフォード-バーナム医学研究所 (Sanford-Burnham Medical Research Institute, SBMRI) に研究留学してきましたので、その研究成果と留学生活の思い出を報告させていただきます。

私が働いていた研究所はカリフォルニア州最南端の町サンディエゴにあり、海岸と丘陵のリゾート地に囲まれた非常にのどかな場所に建っています。設立は1976年(ちょうど私の生まれた年と同じ)で、5つのリサーチセンターの中に1,000人ほどの研究者が働いていますが、米国内の研究所の規模としてはかなり小さい方です。そのせいかアットホームな雰囲気があり、研究者同士の交流が多く、ラボの設備や実験試薬の貸し借りなどは日常茶飯事です。ラボでは、ボスのビル(William B. Stallcup、テキサス州出身)、スタッフのカロリーナ(スロバキア出身)、ポスドクのウェンロン(中国出身)の3人と一緒に働いていました。アメリカのラボではお互いに自己主張が強く、日本人は遠慮しがちなので、溶け込むのが難しいと聞いていましたが、人数が少ないこととボスの性格もあるのでしょうか、皆親切でお互いに気を配り合いながら和気あいあいとした雰囲気で仕事をすることができました。

研究内容とはいうと、このラボではNG2 (neural /glial antigen 2) という分子の機能についてノックアウトマウスを使って解析しており、分子の名前にもあるように初めは神経形成における働きを研究していたようでしたが、間質系の細胞にもNG2の発現が局在し

ていることが分かり、私のテーマは脳腫瘍モデルを用いてマクロファージや周皮細胞におけるNG2の腫瘍血管新生に対する役割を解明することでした。まず、マクロファージと周皮細胞それぞれに特異的なNG2ノックアウトマウスを作成し、そのマウスの脳に移植した腫瘍内の血管の構造と機能を共焦点顕微鏡で評価することから始めました。各種マーカーを用いた蛍光免疫染色の結果からマクロファージと周皮細胞ともにNG2遺伝子を欠損させることによって腫瘍内への血管新生が抑制され、血管壁構造の破綻や血管透過性の亢進、腫瘍内低酸素領域の増加を認めました。最終的にはマクロファージ、周皮細胞、血管内皮細胞の間におけるNG2依存性分子機構をその3種細胞株を用いた共培養系を用いて証明し、NG2は腫瘍増殖に必要な血管新生に重要であり、腫瘍間質に対する治療標的分子として有用であることを示すことができました。

研究も楽しむことができましたが、やはり日本とは違うアメリカならではの生活文化も堪能しました。サンディエゴは19世紀半ばまでメキシコ領だったこともあり、道の名前や建物にスペインやメキシコの影響が色濃くみられますし、場所によってはスペイン語で普通に会話しています。観光名所としてオールドタウンと呼ばれるカリフォルニア発祥の地があり、スペイン人がメキシコからやって来て、カリフォルニアで最初に植民地とした歴史地区です。メキシコ風な町並みと美味しいメキシコ料理のお店が溢れていて、歩いているだけでも楽しいところでした。メキシコ料理と言えばタコスやブリトーを思い浮かべますが、牛や豚の内臓系の煮込み料理やスープなどもあり、初

めは苦手だった私も食べているうちにクセになり、留学生活中の体重増加の一因になったことは間違いありません。また、映画のロケ地になった場所も多く、「トップガン」でトム・クルーズが女性教官と口論の後にバイクで暴走した道やラストシーンに使われたレストランもそのまま残っており、市内観光バスではセントラを流しながらその場所を通り過ぎて行きました。天気の良い週末には、といってもサンディエゴはほとんど毎日晴れているのですが、家族で水族館や動物園にも行き、シーワールドではイルカやシャチのショーの迫力に興奮し、動物園では一日で周りきれないほ

どの広大な敷地での動物との触れ合いに満足し、サファリパークでは車並みの速さで駆け抜けるチーターを間近に見た息子の目が点になっている様子も良い思い出になっています。

最後になりましたが、今回の研究留学にあたり福岡大学医学部同窓会から在外研究援助金を頂戴し、充実した研究生活を送ることができましたこと、心より感謝申し上げます。今後はこの留学で得られた知識と経験を生かして福岡大学医学部の発展に尽力したいと思います。



ラボメンバー
1番左端：ウェンロン
左から3番目：カロリーナ
左から4番目：ビル



オールドタウンにて



シーワールドにて

スタンフォード大学春季留学プログラムに参加して

宮部 美 圭 (M5)

私は2015年3月13日から3月27日の期間、VIA（スタンフォード大学所属団体）主催のExploring Health Care (EHC) プログラムに参加しました。当プログラムは英語のインタビューや書類による選抜を潜り抜けた優秀な医学生が日本全国から集まるものであり、高い志を持つ仲間と共に私はカリフォルニアのベイエリアでアメリカの医療や文化に実際に触れ、学ぶことができました。留学試験対策に関しては、大学の試験期間やCBTの準備と重なったこともあり容易ではありませんでしたが、日常的に英語力の向上に力を入れてきたことが合格の要因であったと思います。昨年8月のシカゴでの研究留学に続き2度目の留学でしたが、今回は病院でのShadowingやStanford Medicine25(身体診察をスタンフォード大学の方達からご指導いただきました)など、BSLの前に臨床にも触れることができました。当然ながらプログラム中の意思疎通はすべて英語でなされ、英語の上達を図る良い機会にもなりました。

留学期間中の第1週目はサンフランシスコに滞在し、臓器移植のドナーとレシピエントの双方からお話を伺い、日本で臓器移植を普及させるにはどうすればよいか参加者同士で意見を出し合いました。豊富なアイデアが集まり視野を広げることができました。またLGBT(Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender)の方が多く集まるCastro地区に訪れ、LGBTの方のためのクリニックを見学したりしました。このクリニックは、無料でHIVの検査や簡単な治療が受けられる

アメリカで唯一の場所です。スタッフはボランティアで働いており、薬代などはすべて寄付金などにより賄われています。日本でも20人に1人はLGBTであると言われており、今後医療を提供する上でさまざまな対応が必要になってくると思います。ここではアメリカの文化だけでなく、医療の多様性も再確認することができました。第2週目はスタンフォード大学のあるパロアルトに移動しました。スタンフォード大学は山手線の内側と同じ位の敷地面積でありながら、研究施設以外にも教会やカフェ、ハイキング場、タワーなどがあり大変充実していました。大学構内ではアメリカで医師をされている日野原重明さんの息子さんをはじめ有名な方々の講演を聞く機会に恵まれました。また、アメリカの在郷軍人のための病院であるVA Hospitalにおいて眼科のShadowingもさせていただきました。休日はゴールデンゲートブリッジやその周辺を約5時間かけてサイクリングに出かけました。天候にも恵まれ素晴らしい景色の中、筋肉痛になりながらも良い経験をしました。

今回の留学プログラムへの参加を通して、スタンフォード大学の医学部生をはじめモチベーションの高い医学部生と交流することで視野が広がり、海外で医師として活躍することを将来の選択肢の一つとしている私にとって大変貴重な機会となりました。グローバル単位で医療を実践する大切さに気付くことができたこの経験に感謝すると同時に、今後留学する学生がさらに増えていけばと思います。



福岡大学医学部同窓会
在外研修援助金 募集要項

①長期研修

対 象：正会員、準会員（本会会費完納を条件とする）で医学の研究または医療技術の習得のため、
3ヶ月以上外国に留学する者

申請方法：所定の申請書により留学出発3ヶ月前までに提出のこと

提出先：〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
T E L 092-865-6353(直通) 代表 092-801-1011 内線 3032
F A X 092-865-9484

援助金：1件20万円を限度とし、年間5件以内

発表：本人に文書にて連絡

その他：①受給者は帰国後その成果を同窓会会報に発表すること

②研修中に生じた問題について同窓会は関与しない

③申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードのこと

平成27年度 福岡大学医学部同窓会
研究奨励賞 募集要項

対 象：正会員及び準会員で、40才未満の者または学部卒業後10年未満の者
(本会会費完納を条件とする)

研究課題：医学に関するものであれば自由（医学に関する研究論文又は研究計画）

申請方法：所定の申請書による（所定欄に支部長推薦を要す）

提出先：〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
T E L 092-865-6353(直通) 代表 092-801-1011 内線 3032
F A X 092-865-9484

締 切：平成28年4月29日(金)

賞状・賞金：奨励賞（優秀論文賞を含む）5件以内

発表及び表彰：平成28年7月、第35回同窓会総会席上 必ず出席すること

その他：①論文受賞者は抄録を提出すること

計画受賞者は1年後研究成果報告書を提出すること

②申請書は同窓会ホームページからダウンロードするか、同窓会事務局に請求のこと

③申請書はワープロで記載し、過去の研究業績（原著、著書、症例報告、学会発表）、
研究の独創性・重要性を十分に書くこと

※準会員の方もお応募下さい。

支部便り

大分支部便り

烏帽子会大分県支部会（かぼす会）会長 鬼木 寛 二（1回生）

大分県支部会は定期的に開催しておりますが、開催日の設定が難しく集まれそうな日（土曜日）を選んで開催しておりましたので中々都合が付きませんでした。一昨年より開催日を固定化しようという提案にて11月の第3土曜日開催することにしました。今年も開催しなければならないが、いつ開催しようか？との悩みからやゝ解放された感じがします。毎年出席者が少なく、全員、ほぼ全員に年賀状で呼び掛けはしているのですが何となく固定化された感じがしまして、開催前に電話で出席を募ったりの毎年です。と言いますのは大分は各市が分散していますので仕事柄遠方に来てまで泊まったりすることが出来ないのかもしれないと思案していますが、開業したりして、それぞれが多忙になられたのも事実です。

さて、暗い話になりましたが、平成26年11月22日の土曜・日曜日に九州医師会医学会が、今年は大分県担当で開催されましたので、烏帽子会本部の意向も有り高木会長や重田副会長が来られる予定も有りましたが、残念ながら全国同窓会会長が東京で開催されるとのことで来られませんでした。代わりと言っては何ですが、福岡大学筑紫病院外科診療教授の二見喜太郎先生に本部代行と講演を兼ねて頂きました。潰瘍性大腸炎やクローン病の素晴らしい外科実績に驚きもあり、同窓会（同級生）として誇りに思いました。現在では各回生の後輩の面々から教授職に就かれるのをみて福岡大学医学部及び病院の成長を感じる今日この頃です。

話は医学会及びかぼす会に戻りますが、医学会と「かぼす会」の開催日が一致しましたので他地区の同窓会員と「かぼす会」が合同で大分の「ふぐ」を高級料亭（割烹にしおか）で堪能して頂き、楽しく飲んで、語り合い、二次会（メンバーズクラブ干

絵）でも全て中村英助先生（かぼす会副会長・本部評議員）にセッティングして頂き高級ワインを沢山飲ませて頂きました。出席の来賓の方々も各医師会では偉く成られて活躍をして居られ本当にエネルギーを感じました。以下出席頂いた来賓の方々とかぼす会員です。今後は単なる福大医学部の歴史だけでは駄目で各地区の来賓の皆さんや卒業生が福大医学部・病院で先頭となり活躍してくれることを願って止みません。

<烏帽子会会長代行・招聘演者>

二見 喜太郎 先生

（福岡大学筑紫病院 外科診療教授）（1回生）

<佐賀支部>

世戸 憲男 先生

（世戸眼科医院理事長）（1回生）

山津 善保 先生

（鳥栖三養基医師会理事、山津医院理事長・院長）
（5回生）

徳永 剛 先生

（佐賀県医師会常務理事、坂井医院院長）（5回生）

<長崎支部>

星子 浄水 先生

（長崎県医師会常任理事、長崎支部長、本部評議員、
星子医院理事長）（7回生）

<その他支部>

馬郡 良英 先生

（前飯塚市医師会長・現福岡県医師会理事、
馬郡医院理事長・院長）（1回生）

小金丸 史隆 先生

（こがねまるクリニック理事長、北九州八幡西区
副会長、県医師会監事）（3回生）

櫻井 日出也 先生

（櫻井整形外科クリニック理事長・院長）（1回生）

以上、ご出席頂きありがとうございました。御蔭で楽しませて頂きました。

<かぼす会>

- 鬼木 寛二 先生
(日田中央病院副院長、大分支部長) (1 回生)
- 中村 英助 先生
(別府中村病院理事長・院長、別府医師会副会長、本部評議員、大分副支部長) (6 回生)
- 渡辺 大介 先生
(医療法人善和会グループ理事長・院長)
(2 回生)
- 江浦 陽一 先生
(江浦耳鼻咽喉科クリニック理事長、元福大耳鼻咽喉科講師) (1 回生)
- 難波 美和子 先生
(尾渡眼科病院副院長、かぼす会会計係)
(8 回生)
- 筑波 貴与根 先生
(筑波クリニック院長) (9 回生)
- 三浦 徹也 先生
(くれさき循環器クリニック院長) (9 回生)

- 藤木 美和 先生
(福田内科医院勤務) (16 回生)
- 松山 和弘 先生
(改正) (松山医院大分腎臓内科理事長)
(18 回生)
- 武井 雅典 先生
(武井医院理事長) (20 回生)
- 境 隆暢 先生
(さかい内科医院院長) (20 回生)

藤木美和先生と星子浄水先生は一次会閉会前に帰られましたので集合写真には写って居られません。いつもは出席されていますが、今回欠席された先生は、

- 市川 弘城 先生
(皮膚科市川医院院長、新本部評議員) (7 回生)
- 矢田 公裕 先生
(矢田こどもクリニック理事長・院長、かぼす会広報担当) (7 回生)
- 柳田 尚穂 先生
(亀川精神保健クリニック開設者、管理者)
(7 回生)



会員寄稿

今春より長男が母校に御世話になります ～ 22年の医師人生を振り返って～

医療法人 尾石内科消化器科医院 副院長 尾石 弥生 (16回生)



1. はじめに

今春より、長男が1浪で母校福岡大学（以下福大）医学部にお世話になることが決まりました。合格直後、私達夫婦で予備校に御挨拶に行ったら、「余計なことはしなくていい。」と長男に言われたので、ああ子供の時代だなどと思う心と、自分の事は今のうちに同窓会に寄稿しようと突然思い立ち、書くことにしました。最近女性の学生さんと医師が増え、キャリア取得の事など、各学会や医師会で話題が豊富です。しかしながら、簡単に両立ができる職種でないことは確かで、この件に関しては一言で見解を述べることはできません。「女優」、「看護婦」のように現在は使用されない単語と同等でいいと思われる「女医」という表現には私自身反対派なので、医師の立場での話としてお付き合い頂きますと幸いです。

2. 夫婦でライフワークとなった仕事と子育ての両立

医師になって3年目で結婚すると同時に、八尾恒良福大名誉教授（以下教授）率いる福大筑紫病院消化器科（現消化器内科）に入局、夫婦共々身分は同医局の大学院生となりました。と同時に、長男妊娠が発覚しましたので、真っ先に教授へ相談に行きました。答えは「学位論文は、書こうと思ったら書く時間は充分ある。あとは本人次第よ。」の一言。この教授の「本人次第」は、その後の私の医師人生の中にずっと生きているフレーズです。当時、この一言がきっかけで、仕事と言うよりは学業と育児を軌道に乗せる事

を決心しました。具体的準備は一つ。我々が学ぶための時間の確保と、子供の食育を充実させるために、我々の分身を雇用しようとしたことです。雇用するための会社を設立、職安を通じて募集をかけました。夕方の保育園の迎えから、我々が自宅に戻る迄の親代わりをして下さる方。早い時で21時、遅い時は23時近く迄。福大筑紫病院は、どうしても昼間臨床をしなければなりませんでしたが、これぐらいの帰宅時間は致し方ありません。一方で子供の夕食の時間はずらせませんし、子供が寝ていて我々と会えない日も続出しますが、仕方ありません。子供には子供の時間があり、社会がありますので、お互いの生活リズムは崩せません。こうして始まった両立という夫婦のライフワークでしたが、翌年には二人目の息子が生まれ、実はこの生活に益々拍車がかかってしまいました。この夜間保育園状態を引き受けて支えてくださったのが、当時50歳代の子育てが終わった女性で、保育士の資格を持った方でした。その方が退職される時、「長男さんをきちんと育てたら、必ず次男さんも着いて来られますから。」と。その言葉は年々実感しており、今回の長男合格に導いて下さった気がしてなりません。人間は、多くの出会いに支えられて生きているものです。捕捉ですが、その方が退職された後も、少し時間を置きながら、その時々我々の生活ニーズに合わせ、現在は3人目の分身の方を雇用中です。（写真1、写真2）

3. 学位取得

私の学位論文のテーマは、「クローン病に合併する膵炎の臨床的特徴」でした。しかしながら、所属していた研究グループ（膵胆道疾患担当）は上司の植木敏晴先生（8回生、現福大筑紫病院消化器内科准教授）と私の二人だけと、弱小チームでした。それでも



(写真 1) 夜間保育が続いていた 2 歳(右)と 3 歳(左)の子供達。息抜きにハワイへ家族旅行しました。



(写真 2) 主人は今で言う育メンパパです。兄弟で生存競争が激しく、真ん中の次男はハンバーガーを手放さず、同じくハワイにて。

治療内視鏡がしたくて選択した道で、昼の臨床は楽しくて仕方がなかったのですが、研究となると書けない、話せない、スライドも満足に作れないと出来の悪い医師でした。当然教授からは、説教どころの騒ぎではありません。後にも先にも女性医師であそこまで教授に怒鳴られ続けたのは、私だけではないかと思っている次第です。さすがに、論文提出前のデータ整理は夜の時間では足りず、家族が寝静まった深夜 2 時頃から明け方まで膵臓の画像をチェックするために、医局に夜な夜な通っておりました。教授が怖くて 48 時間眠れない事もありました。その頃子供達は、どうしていたのか覚えていませんが、教授の配慮で夫婦半年ずらして学位を取得した事だけは記憶してい

ます。最終的には、松井敏幸助教授(現福大筑紫病院消化器内科教授)の御指導も加わり、英文原著、総説へと仕事が完成していきました。本当に御指導頂いた先生方には感謝以外の何物でもなく、諦めず根気よく付き合っていました。(写真 3、図 1、図 2)

4. 勤務医時代

大学院卒業後の出張は、済生会二日市病院に 3 年、福岡市医師会成人病センターに 3 年勤務しました。済生会二日市病院は、現在の福大筑紫病院に類似した筑紫地区の救急医療の中枢を担う病院のひとつです。女に勤まる訳ないと、嫌みのひとつやふたつ頂きながら勤務が決まりましたが、何せ学位取得



(写真 3) 恩師の八尾恒良福大名誉教授御夫妻と。傘寿の会にて。

J Gastroenterol 2004; 39:26-33
DOI 10.1007/s00535-003-1241-5

Journal of
Gastroenterology
© Springer-Verlag 2004

Abnormal pancreatic imaging in Crohn's disease: prevalence and clinical features

YAYOI OSHI, TSUNEYOSHI YAO, TOSHIYUKI MATSUI, TOSHIHARU Ueki, TOSHIHIRO SAKURAI, and SEIGO SARAGUCHI
Department of Gastroenterology, Fukuoka University, Chikushi Hospital, 377-1 Onza Zokumyoin, Chikahino 818-8502, Japan

(図 1) 苦労した英文原著

消化器科, 40(2): 151-155, 2005

40: 151

特集 I 炎症性腸疾患の腸管外合併症

クローン病における膵炎*

尾石 弥生****
植木 敏晴**
松井 敏幸**

(図 2) 日本消化器病学会総会ワークショップ発表直後に、原稿依頼がきた総説。

のとてつもない苦しみを味わった直後だったので、救急車が5台来ようが10台来ようが全てOKです。ERCPやEST、吐血に大腸内視鏡と、何でも来いでした。循環器科の先生から一晩に二回止血の緊急内視鏡に呼ばれ、一睡もしなかったことがありますが、全く平気でした。幸い病院の近所に住んでいましたし、温かいパラメディの応援の元、子供が病気をすると私がERCP出来ないからと、子供を入院させていただき同室の患者さん方にご厄介になっておりました。上司であった胃腸科の帆足俊男部長(9回生、現帆足胃腸科内科医院院長)から、「お前を女と思わなければ理解できる。」と言われた時は、やっと私の事を理解して頂ける先輩に出会ったと思い、かえって感動したものです。帆足先生には私の大腸内視鏡のフォローに根気強く付き合って頂いた上、症例報告まで書かせて頂きました。

福岡市医師会成人病センターは、医師会立ということもあり、現在我々が粕屋地区で仕事を開始する原点となった医療機関です。外科は無くても相変わらずのスタンスで私は好きなことをしましたが、膵臓との関連で糖尿病に興味があり、内科部長の田尻祐司先生(九州大学第3内科、現久留米大学内分分泌代謝内科准教授)に指導を仰ぎ、現在の私の糖尿病診療の基本もここで培われました。当時、福岡大学・九州大学・久留米大学の勢力図が等しい中で医局長を任された難しさがありましたが、臨床的な実績のある先生を、上下関係度外視して医局会で公表するというシステムを採用してみました。欧米式の発想かもしれませんが、非常に活発な医局で、お陰で当時の先生方や後輩達とは、大学医局関係なく今でも年賀状のやり取りをする貴重な仲間です。医師になって始めて早期膵癌を自力で見つけたのもこの頃で、福大の池田靖洋教授(現福大名誉教授)に執刀して頂きました。大変御世話になりました。(写真4)

ちなみにこの二つの病院の当直は、男性医師と条件は何ら変わりなく、飲み会参加も普通、夫から自宅のチェーンをかけられて閉め出され、外科医の先生方と飲み直した事もありました。多分嫁としては最悪です。



(写真4) 膵臓手術でお世話になった池田靖洋福大名誉教授、上司の植木敏晴准教授、ソフトバンク王会長と。池田靖洋教授退官式にて。

5. 開業して

2005年暮れに義父の大病がわかり、主人から連絡が入り「一緒に開業しよう。」と言われました。その頃、勤務医としては仕事が軌道に乗っていたので、思いもよらない事でした。具体的に開業医をイメージした事はなく、経営の事を考えた事ありませんでした。しかし、やるからには1番になると決心してしまい、夫婦でどっぶり自営をする事にしました。2006年4月継承、2007年5月医療法人化、夫婦で理事長と理事として安定企業を目指し現在に至っております。紆余曲折の開業10年目ですが、お陰様で多くの一般外来診療の他、年間の上下部内視鏡1,500例、各種超音波検査3,000例、糖尿病診療患者数が月のべ200例以上と、それなりの数字を夫婦で維持しております。内科医会を始めとした講演活動や、消化器および糖尿病分野の世話人に夫婦それぞれお呼びがかかり、拙い話題ではありますが、ゲストの先生の前座もさせていただいております。勉強は出来る時にしておくと、肝に銘じて日々過ごし、今年は、開業して3度目となる学会発表も夫婦で達成したいと考えています。(写真5)

6. 最近の医学部受験事情

とにかく、今の医学部受験事情は厳し過ぎます。国立私立関係なく目標偏差値は65から70。福大は2年前の受験から、合格率が推薦入試11倍以上、一般入試20倍以上に跳ね上がる異常事態です。関東方面の医学部は、多浪は合格させないとの噂まで



(写真 5) 毎日夫婦で切磋琢磨している尾石内科消化器科医院。平成 18 年に全面改装しました。

流れ、医学部受験界の厳しさは一層拍車をかけています。私が子供達に小学生の頃から言ってきたことは、「いい社会人になる事を考えなさい。」で、医師になる事を強制して来た事はなく、むしろ息子二人とも医学部志望に関しては反抗的な態度をとっておりました。次男は早々に文系志向で自分の生きる道を決めておりましたが、長男は、進路を決める最終段階の高校 3 年 1 学期途中で医学部に行くと言い出し、本格的に対策を始めました。高校の成績はさほど良くなく、担任の先生からは「福大医学部はなかなか合格できないんですよ。うちでもかなり優秀な子が推薦試験を受けても通りません。」と。うちの長男に関しては全く門前払的の反応でした。しかし、幸い教師陣と教材に恵まれた中高一貫校に在籍していましたので、あくまでもその教材を元に医進系予備校に依頼、個別指導で徹底的に本人の弱点を絞り込み、現役時代は高校卒業後の 3 月に行われる私立医学部後期試験まで可能な限りの医学部受験を経験させました。そのままの勢いで浪人、予備校ゼミ生となり、11 月の福大一般推薦入試まで根気よく、泥臭く力を向上させていきました。医学部志望は自分で決めた道でしたので誰にも邪魔はさせず、高校時代の交友はいったん断ち切り、長男に言わせると「受験に熱中していた。」そうです。要は「本人次第」なのですが、とにかく福大入試は基礎学力が 100 パーセント求められますので、油断したらダメです。たとえ推薦入試が英語と数学の 1 時間であっても、2 月の一般入試まで見越して理科をきちんと準備し、推薦入試は運がよ

ければ通るぐらいの感覚で考えていた方がよいかと思えます。福大医学部志望のお子さんがおられたら、9 月ぐらいの模試で結果が出ると、推薦でも一般でも合格の見込みがありますので、慎重に応援してあげてください。そして、可能なら予備校に任せ過ぎず、お子さんに声を掛けられる距離に親がいた方が、メンタル的には安定するかもしれません。

長男は福大に合格した今、得意の英語を生かしたいらしく、留学や国際学会発表など夢を膨らませているようです。私どもの学生の頃とは、スキルが違うねと、主人と言っておりました。福大生になっても、このスキルを維持してほしいものです。(写真 6)



(写真 6) 福大医学部推薦入試直前。家族で食事会をしました。中央が長男、左が次男。

7. おわりに

福大は、現在国家試験の合格率が問題になっているようですが、それは医師人生の入り口より手前の話です。学生さんに言いたい事は、せっかく苦しい思いをして福大に合格した時の事を忘れないで欲しいということです。そして、これから 6 年間学費を納入していく親としては、より一層充実した教育機関へと福大医学部が発展する事を切に祈っております。それでは、最初で最後の私の寄稿を終わり、次の寄稿は長男に託したいと思います。我々夫婦は仕事ばかりではなく、“赤ワインを飲むこと”“朝のコーヒータイム”“オーディオ鑑賞”“素材にこだわった料理”“スポーツジム通い”と、共通の楽しみを極めていこうかと思っております。ちなみに主人は、言いたい事は私が言ったので、寄稿はもういい?だそうです(笑)。

同窓会事業

当直医パニックマニュアル第2版出版のご報告

糸島医師会病院 内科 北 島 研 (21 回生)

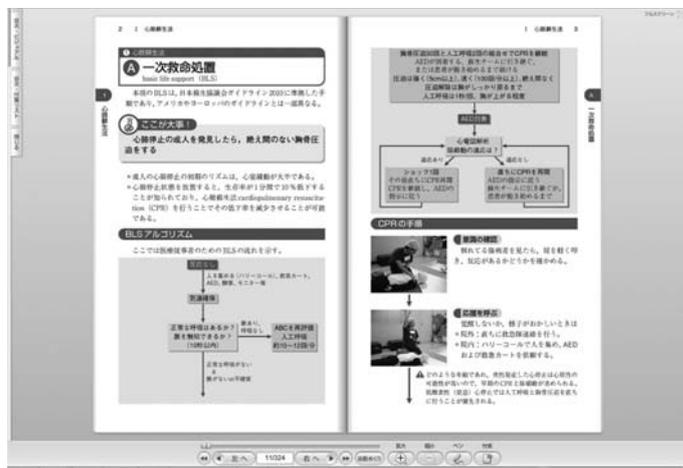
平成4年に烏帽子会より誕生した同窓会先輩医師から後輩への指導書、パニックマニュアルは、通算第6版目になりました。前版より『当直医パニックマニュアル』として出版社海馬書房より、これまで合計900部が全国の書店で販売されました。聴診器と鉗子の赤黄色の表紙・背表紙はインパクトがあり、第2版にも引き継がせて頂きました。

第2版への改版ポイントは「定義、診断、手技、治療、薬剤や、それらに関わる指針・基準やターミノロジーについて最新のものに見直す」として、この5年間で新しくなったガイドラインを参考に。各先生の工夫や思いを取り入れ執筆して頂きました。前回に引き続きご執筆頂いた先生方はもちろん、新たに執筆を引き受けて下さった先生にもこの場をお借りして心

より御礼申し上げます。

また今回の改版でのもう一つのポイントとして、烏帽子会ホームページより『当直医パニックマニュアル第2版』がデジタルブックで、製本版と同様に閲覧出来るようになりました。パソコン、スマートフォンをお持ちの先生方は、烏帽子会ホームページへアクセスし、デジタルブックID panic002(ゼロゼロ二)、パスワード fukudai1(イチ)を入力すると、ご覧頂けます。製本版とともに、外来や当直時など日常診療の現場でご活用して頂けますと嬉しく思います。

次回は平成30年頃より改版に取り組む予定です。今版同様、会員の先生方からの幅広いご意見を取り入れて行きたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いたします。



☆☆ 縁結びについて ☆☆

現在、同窓会事業として“縁結び”を行っています。内容は、同窓会員、同窓会員家族、同窓会員の推薦する人を、サイトを通じて紹介していこうというものです。昔のお見合い事業です。今でいうマッチングでしょうか。身元のしっかりとした相手と未来を夢みて生活していく。その第一歩目を同窓会がお手伝いしたいのです。

是非、同窓会サイトを開くか同封の案内書をご覧になって、必要事項記入の上、同窓会事務局まで、みなさんの応募を心よりお待ちしております。

担当理事 田野茂樹 (6 回生)



学生対策報告

BSLにむけて

佐々木 颯 太 (M5)

この度はこのような盛大な白衣授与式を催していただき、誠にありがとうございます。烏帽子会の方々、並びに福岡大学医学部の先生方に五年生一同を代表して厚く御礼申し上げます。

私たちは入学してから四年間、座学を中心に日々医学を学ばせていただきました。そして気付けば五年生となり、本日このような素晴らしい白衣を頂くに至りました。同級生の白衣姿を見て、また自ら白衣に袖を通してこれから臨床実習が始まるということを改めて実感し、身が引き締まる思いがします。実際に病院で学ばせていただくからには、今までの医学知識が実臨床の場でどのように活かされるのか、また患者さんや病院スタッフの方々のコミュニケーションの取り

方など臨床でしか得られない部分を積極的に吸収していきたいと思っています。ただ、病院には実際に病気に苦しむ患者さんが数多くおられます。そこで今までのような学生気分では学ぶことは許されません。そのような場で学ばせていただくということへの感謝の念を常に忘れず、日々の実習にあたっていくという覚悟が必要になると感じています。

これから約一年半BSLを行わせていただくに当たり、この初心を忘れず真摯な態度で臨ませていただく所存です。患者さんをはじめとする多くの方々への感謝を忘れず、この一年半を必ずしや有意義なものにしたいと思っています。短いですが、以上を御礼の言葉とさせていただきます。



キャンパス便り

《平成 26 年度 烏帽子会賞受章者名簿》

受賞者	姓名	受賞対象
バスケットボール愛好会	団体表彰	第 66 回西日本医科学生総合体育大会 女子バスケットボール愛好会 優勝
アーチェリー愛好会	吉田圭希	第 7 回西日本医科学生アーチェリー競技大会 男子総合準優勝

烏帽子会賞を受賞して

バスケットボール愛好会 稲田悠希 (M5)

女子バスケットボールは、第六十六回西日本医科学生体育大会において、優勝することができました。今回はこの成績により、烏帽子会賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

私たちは、今年の西医体は絶対に優勝しようと目標を掲げ、日々練習に励んできました。苦しい試合もありましたが、引退する六年生となんとしても優勝したいという気持ちでプレーしていました。コーチをしていただいた猪狩さんからいつも言われていたことなのですが、チームプレーは、お互いにコミュニケーションを取りながらチームのみんなが共通の認識を持ち、同じ方向を向いて戦えた時が一番強いと思いま

す。バスケは、コート上の五人が噛み合わないとなかなか上手くいきません。苦しい時も励ましあいながらプレーできた今大会で、チームワークの重要性を再度実感することができました。私は、昨年九月からキャプテンをやらせてもらいましたが、一年間やってこられたのは何と言ってもチームメイトの協力があったからです。本当に感謝しています。

忙しい中コーチをしていただいた猪狩さん、金沢まで応援に来てくれた看護科の皆さん、応援していただいたOB・OGの先生方、男子バスケ部の皆さん、また、お祝いの言葉をいただいた多くの方々、本当にありがとうございました。



西医大結果報告

アーチェリー愛好会 吉 田 圭 希 (M6)

烏帽子会に原稿を書く機会をいただいたので、大会の結果報告等をさせていただきます。

今回アーチェリー愛好会では西医体において男子個人準優勝をしました。

アーチェリーは近年やっとオリンピックのおかげで競技の知名度が少し上がっては来たものの、まだまだ日本ではマイナーなスポーツであり、一体どういったスポーツ



なのかは知らない方も多いと思うので、少しアーチェリーについて書かせていただきます。男子は30m、50m、70m、90mの距離を洋弓を使って矢を射ま

す。弓は主に手に持つハンドル部分と、矢にエネルギーを与えるリム（しなる部分）、スタビライザーと呼ばれる安定させるための弓から突き出た棒、的を狙うためのサイトから構成されます。そのすべてを精密に調整することで遠くの的を射抜くことができます。自分は今まで様々なスポーツをしてきましたが、アーチェリーはその中でも特に自分自身に向き合えるスポーツだと思います。敵は自分自身であり、他の人の点数などに気を取られていると良い点数を取ることができません。遠くの的を狙うときは心拍に合わせて微妙に上下する手の動きと呼吸による胸郭の変化から来る手の上下とをタイミングを合わせて矢を射ないと的に矢を当てることはできません。また、横風や雨によっても当たる位置は変わってくるので非常に集中力が必要となってきます。的と自分以外何も目に入らないほど集中した時は面白いほどの矢が集まって行きます。あと、アーチェリーは生涯にわたって続けることのできるスポーツであるのも魅力だと思います。この記事を読んで少しでもアーチェリーに興味を持っていただけると嬉しいです。

福岡大学医学部同窓会 烏帽子会賞褒賞基準

1. (目的) 福岡大学医学部同窓会(以下烏帽子会という)は、その所属する学生会員が対外試合または活動において優勝し或いは優秀な成績を取った場合、その団体または個人に対し、その榮譽を讃え賞状、賞金または賞品を授与してこれを表彰する。
2. (賞の名称) この賞を烏帽子会賞という。
3. (対象試合等) 表彰の対象となる試合または活動とは、概ね西日本医科学生総合体育大会、九州 山口医科学生体育大会を含むその規模以上のものを云い、内容は単に体育関係のみならず学術、芸術等多岐に亘るものとする。
4. (申告書の提出) 烏帽子会は烏帽子会が表彰に値すると認めた団体または個人、或いは自ら表彰を希望する団体または個人に対し、烏帽子会賞申告書及び賞状の写しをを提出させる。
5. (表彰の審査) 表彰の審査及び賞金額の決定は理事会において行う。賞金または賞品の支給基準額は別表の通りとする。
6. (表彰) 表彰は総会、理事会等の席上で行い賞金を授与し会報に掲載する。
付則 1、この基準は平成18年4月1日から施行する。
2、この改正基準は平成22年1月15日から施行する。

別表) 烏帽子会賞の基準

		西医体：A	全医体：B	九山：B	その他：C
団 体	優 勝	A-1 50,000円	B-1 30,000円	B-1 30,000円	C その都度判定
	準 優 勝	A-2 40,000円	B-2 20,000円	B-2 20,000円	その都度判定
	3 位	A-3 30,000円			
	4 位	A-4 20,000円			
個 人	優 勝	A-3 30,000円	B-2 20,000円	B-2 20,000円	C その都度判定
	準 優 勝	A-2 20,000円	B-1 10,000円	B-1 10,000円	その都度判定
	3 位	A-1 10,000円			

※但し烏帽子会賞は同一大会に1個とし、上位の成績を表彰する。参加チーム数の少ない場合は理事会にて減額することができる。
5年連続受賞においては殿堂入りと賞する。

訃 報

特別会員	檀 健二郎 先生	平成 26 年 7 月 31 日	ご逝去 (麻酔科学)
特別会員	満 留 昭 久 先生	平成 27 年 2 月 6 日	ご逝去 (小児科学)
正 会 員	豊 島 潔 先生	平成 26 年 6 月 1 日	ご逝去 (7 回生)
正 会 員	四 宮 義 浩 先生	平成 26 年 6 月 2 日	ご逝去 (11 回生)
正 会 員	富 田 祥 夫 先生	平成 26 年 8 月 31 日	ご逝去 (4 回生)
正 会 員	加 藤 清 信 先生	平成 26 年 11 月 4 日	ご逝去 (13 回生)
正 会 員	矢 野 善 一 郎 先生	平成 26 年 11 月 15 日	ご逝去 (9 回生)
正 会 員	日 山 昇 先生	平成 27 年 3 月 14 日	ご逝去 (1 回生)
正 会 員	重 川 浩 司 先生	平成 27 年 4 月 16 日	ご逝去 (12 回生)
正 会 員	大 川 正 幸 先生	平成 27 年 4 月 25 日	ご逝去 (1 回生)

檀 健二郎先生を偲んで

後藤麻酔科クリニック 院長 後 藤 英 一 (1 回生)

昨年 7 月 31 日夕焼けの頃、檀健二郎先生がご逝去された(享年 86 歳)。5 月 2 日に右胸水、間質性肺炎の診断で福岡大学病院呼吸器内科に入院され治療を受けられていた。お見舞いに伺ったのは、胸腔ドレーンが抜去されたばかりの時に「ずいぶん楽になったばい。これからリハビリを頑張って体力を取り戻さないといかん。」と筋肉が削げ落ちか細くなった足をさすりながら、弱々しい声ではあったが前向きに話をされていたので安心し病室を後にした。その後は、徐々にお元気を取り戻されてたと聞きおよんでいたが、7 月の終わりに間質性肺炎の急性増悪によりお亡くなりになられた。

檀先生には、第 1 回卒業生として麻酔科に入局以来、麻酔科 9 年間および救急部 2 年間に亘り直属の上司としてお世話になった。熊本陸軍幼年学校出身だけあって頑固で厳しい先生であった。臨床麻酔に関しては、当時、全国的にも数施設でしか行われていなかった腹部開腹手術に対し、気管挿管せず硬膜外麻酔に軽い鎮静薬および酸素・笑気投与、自発呼吸下で維持する麻酔管理法を徹底してトレーニングされた。しかし、入局後遅々として進まぬ麻酔に関する知識・技術の向上のなさから硬膜外麻酔が効いてなかったり、患側とは反対のみ効いていたりと散々な結果に再三陥り、こっそりと他の麻酔法に逃げると何故かよく教授に見つかり「何で他の麻酔法に逃げたのか。何で挿管したのか。」と怒られた。その度毎に自

分の技量のなさは棚に上げ「別に硬膜外麻酔だけが麻酔法ではないじゃないか。」と心の中で反発し「もうこんな所辞めてやる」と思い続けていた。しかし、指導してくれる麻酔科医が誰もいない、Man power も手術室の設備も大学病院と違って充分とはいえない、また集中治療室など到底ない市中病院へ 1 人で出張麻酔に行くようになった研修医 2 年目になって初めて、教授が推し進めていた臨床麻酔の安全性や臨床麻酔科医としての立つ位置が少し理解できてきた。その頃から少しずつ麻酔の面白さが理解できてきた。

ペインクリニックでは痛みの治療、特に帯状疱疹や癌性疼痛について麻酔科教授時代から教授職退官後も長年にわたり地道に持続的に研究を続けられていた。臨床麻酔や集中治療、救急医療に興味があり大学でペインクリニックに直接従事したことはなかった。他大学の麻酔科が引き上げた北九州市立小倉病院(現 北九州市立医療センター)へ入局 5 年目に高森先生、富宿先生の 3 人で赴任した時には、わざわざ北九州まで指導に来ていただいた。しかし、前任の他大学の麻酔科先生達が診ていた患者さんは一切診療されずわれわれが診療していた。また不定愁訴の多い新患には面と向かって「わしは診らんばい」の一言で断固として診療拒否され、後でわれわれが患者さんに謝るのであるが大変であった。そういった一面を体験したこともありペインクリニックには近寄りがたかった。

北九州市立小倉病院から大学へ戻って3年後、麻酔科を辞して内科への転科を考えてた頃「2年間でいいから」と言われ救急部へ移動となった。移ってすぐに「あんたはもう麻酔科じゃないばい」と言われ、ようやく束縛から逃れたと思っていたら「ちょっと部屋まで来てくれ」と頻りに部長室に呼び出され「あれはどうなってる?」「何で報告しない」と主語のない質問を投げかけられ、何のこともやら解らず返答に窮していると、頭皮を掻きむしりながら畳み掛けられる小言と受け入れがたい指導の嵐、それに続く長い沈黙の時間。その後も、何度となくあの狭い部屋で2人きりで長時間をご一緒したことか。おかげで長い沈黙の時間に書棚の蔵書の背表紙を眺めてはその書名を覚えた記憶がある。檀教授との麻酔科・救急部時代の思い出は、叱られてばかりで小言を言われ続けた11年間のあまり楽しくはない思い出が多く想い出される。

大学を退官されて数年たったある平日の夕方、長住でコーヒー豆を購入中、ただならぬ視線と気配を背

後に感じ振り返ると、お店の外でじっとこちらを凝視し佇まれている檀先生がそこにおられた。あわてて外に出て数分間立ち話をした後、「今度、ゆっくりお話をしに先生のお宅に伺います」と思わず言ってしまうお別れした。4～5日後に「いつ来るのか」と突然家に電話があり、直ぐの休日昼過ぎにご自宅に伺うと、お伝えした時間前から外でずっと待っておられた。すぐにお暇するつもりで家に上がったが、なかなか帰れそうにない雰囲気で気がつくときすっかり外は暗くなっていた。お暇を告げると「大学を退官して10年近く経ると、めったに人と会うことがなく年寄りには学会に行くのが唯一の楽しみたい」と寂しげに呟かれ「今度はいつ来るのか」と続けて聞かれ、それからは毎年、年に1、2回はご自宅を尋ね数時間世間話をした。時折、大学時代を髣髴させるような指導、小言を言われることもあったが、ずいぶん穏やかで気さくないお年寄りになられたのが思い出される。

ご冥福をお祈りします。

弔辞

福岡大学医学部 小児科学 主任教授 廣瀬 伸 一 (3回生)



満留先生

福岡大学医学部小児科学教室とその同門会を代表しまして、また不肖の弟子として先生にお別れのご挨拶を申し上げます。

先生は質実剛健のお人柄。虚飾を排し、不遜を嫌悪して、子どもたちの幸せだけを考える学究の小児科医でした。一方、自厳他寛。「自分には厳しく、他人には優しく」を体現する、理想の教育者でした。

今から40年近く前、医学生として先生の薫陶を受けた時、私と真逆のお人柄に接し、強く惹かれました。卒業後は、先生に吸い寄せられるように小児科の門をたたきました。先生はまだ助教授の時代でした。

先生とのこの出会いにより、私は小児科医になり、先生から勧められた基礎医学を学び、そしてライフワークである「てんかんの遺伝子研究」を賜り、今の自分があります。先生にお礼を申し上げるとともに、人生の師と出会った我が運命にも感謝したい思いです。

先生は、門下生に常に言葉ではなく、努力する自らの背中は何をすべきか、どうあるべきかを常に示してくださいました。私もその背中に、いつか追いつくように、唯、何も考えずに、今日まで走って参りました。でも、先生に追いつけるかと思うと、先生の背中はいつもし先にありました。

私が小児科の勉強を始めた頃、先生は小児科診療の陣頭指揮に立たれておられました。小児科医としての知識、技量も遙かに上の先生に追いつくことが目標でした。そんな小児科診療を通じて、小児科医

としての誇り、大いなる喜び、そして、その悲しみさえも、先生は背中中で教えてくださいました。

先生はまもなく主任教授になり、やがて医学部長になられました。私も、小児科医として、先生にすこし近づけたかなと思う頃でした。しかしながら、先生は次に小児科医は良き教育者でなくてはならないことを示されました。学生主体の教育、教えながら自らも学ぶ等々、新しい医学教育理念に取り組みられました。先生の背中がまた遠くなりました。

先生が福岡大学を退職された後、私は後任として、曲がりなりにも学生教育も預かるようになりました。その頃、先生はこどもの村の設立、運営に尽力されるようになりました。小児科医は社会の一隅にたたずむこどもたちに目を向け、そのためには社会の取り組みさえも変えなくてはならないことを、自らの献身的な働きで示されました。そんな先生のお姿はまた一歩先にありました。

先生はすでにご自身の病氣と戦っておられました。最後まで決して弱音を吐くことはなく、私どもにはいつも笑顔で接しててくださいました。「自分には厳しく、他人には優しく」。先生はずっとそうでした。私の

不明も、忸怩たる過ちも、決して叱責されることはありませんでした。それどころか、先生のほうが、ちょっと困ったような、すこし悲しそうな表情をされるので、益々恐縮したものでした。それに甘えて、ずっと迷惑をかけてきた私をどうぞお許してください。先生はまさに春風をもって人に接し、秋霜をもって自らをつつしむ、私どもの偉大な慈父でした。

先生は、このように私どもの一足先、一足先に立ち、優しく導いてくださいました。そして、今、私どもが届かない世界に旅立たれます。道しるべを失った私どもは悲しみと不安でいっぱいです。しかしながら、これは、「自分で考えて、気づきなさい。」という先生の教えを、命を賭して示してくださったものと、今は解釈せざるを得ません。福岡大学医学部小児科学教室並びに同門一同は、先生の遺志に背くことなく、今後もこどもたちの幸せに向け、自ら切磋琢磨することを、ここに誓います。どうぞご安心ください。

満留先生永い間ありがとうございました。先生との、終のお別れの時がきました。どうか安らかに眠りください。

豊島 潔先生を偲んで

福岡大学筑紫病院 消化器内科 准教授 植 木 敏 晴 (8 回生)



豊島 潔先生は、福岡大学医学部医学科を卒業し、昭和60年に福岡大学第一内科(奥村 恂教授)に入局されました。私を含めて同期入局は11人(敬称略:間、大蔵、北原(森田)、辰巳、徳光、戸原、豊島、野見山、藤井、眞武)で、先生は小倉高等学校の先輩でした。入局後、福岡大学筑紫病院が開院となり、その後、先生は大蔵先生(平成16年9月20日:ご逝

去)と共に筑紫病院に移動になりました。先生は、書籍が大好きで、国語力があり、社会情勢や日本史に詳しく、特に歴史に関する知識や記憶力が抜群でした。患者さんと、特に年配の患者さんと非常に良好な関係を築いておられました。先生から患者さんは人生の先輩が多く、ラポールをとるためには医学の知識だけでなく、一般教養や社会の動向を知ることが大切であることを学びました。とても感謝しています。そして研修医の2年間を終了後、先生は、私、徳光、戸原と共に第一内科の肝臓グループ(現消化器内科)に入りました。

先生は平成3年の胃癌術後に、二日市共立病院の

常勤となり、ご結婚後、2人のお子さんを立派に育てられました。昨年、御子息の颯一郎さんが福岡大学薬学部に、御令嬢の花香さんが筑紫高等学校に進学されました。最初の手術から21年が経過しましたが、平成24年に異時性の胃癌のため二見喜太郎先生(1回生)の執刀で再手術が行われました。術後の化学療法で経過は順調でしたが、その後ご自身で行った超音波検査で肝転移が見つかりました。何事にも弱気な言葉を言わなかった先生ですが、肝転移を自分で発見したときは大変落ち込んだ様子でしたと奥様が話されておられました。私が週に一度二日市共立病院に勤務している関係で超音波の再検査を依頼されました。CT検査でも同様に4個の肝転移巣があり、新たな抗癌剤治療が始まりました。食事が十分に摂取できず、苦しかったと思いますが、二日市共立病院の院長、スタッフや私に、そして、患者さんにいつも明るく接しておられました。その後、腹水が出現し、経口摂取が困難になり、平成26年6月1日にご家族に看取られてご逝去されました。

豊島先生は、皆さんご存知のように大変お酒が好きでした。歓迎会や送別会の際には、私が必ず一緒に西鉄電車に乗せるのですが、自宅近くの太宰府駅で降りずに再び天神に向かわれ、「隠れ家?」と言う飲み屋に行ったことを、後日先生からよく聞かされました。泥酔され、JRの線路で寝ているところを警察に通報され、パトカーで自宅まで護送されたこともありました。先生は深酒されても、他人に暴言を吐くことや暴力を振ることはなく、心優しい酔っ払いでした。飲

み会の翌日も必ず定時には出勤されていました。先生の温厚で、礼儀正しい人となりから、患者さんを始め院長先生やスタッフから大変信頼され、そして深酒されるのでとても心配されていました。本当は、お酒以上に飲み会の雰囲気が好きだったのでしょうか。私は週に一度二日市共立病院の当直をしていますが、学会や研究会のため、先生にしばしば当直の交代をお願いしていました。先生は快諾され、私の到着が遅い時も何も言わずに待っていてくれました、入退院を繰り返していましたが、最後に筑紫病院に入院されるまで、当直の引き継ぎの際に日本史や社会情勢などいろんなお話をして頂きました。先生は高校の先輩ですが、気さくで何でも話せる兄貴のような存在でした。

パトカーでの護送事件以来、先生は、医師会、筑紫病院や肝胆膵グループなどの行事には出席を控え、自宅でスポーツ番組や昔のドラマを鑑賞しながら夜遅くまでお酒を飲んでおられました。ご家族からは先生がとても優しい夫であり、良い父親であったと伺っておりました。先生は家族から尊敬され、そして何より御子息や御令嬢の成長を楽しみにしておられました。とても無念だったと思いますが、どうか天国からご家族を優しく見守ってください。そして大好きなお酒を飲みながら、歴史物の読書やテレビ鑑賞をしてください。もう先生の日本史の話を拝聴できませんが、安らかにお眠りください。

豊島先生、さようなら。そして最後に、長い間誠にありがとうございました。

四宮義浩先生を悼む

ゆうほくクリニック 院長 竹尾 浩 真 (11回生)

平成26年の夏、突然、四宮先生が逝去されたことを知りました。彼とは第二外科に同期入局し、苦しくも楽しい研修医～助手時代の約10年を共に学び、互いに切磋琢磨して過ごしました。その時からあつという間に25年がたちましたが、あの屈託のない笑顔と

彼の声を二度と見ることも聞くことができないと思うと非常にさびしく、悲しみと同時に苦しくもなります。

研修医時代、彼が担当(副主治医)患者さんの誰も気づかなかつたわずかな異常を見つけ報告し、患者さんを救命したときのことは今でも忘れません。四宮!

すごいなあ、と同期で言い合ったことを思い出します。その年の秋に医局の方針で江田島海上自衛隊学校に3日間の体験入学という行事がありました。その登山訓練で、私は教官の教えにそむき水を飲み干し喉がカラカラになっていましたが、彼が自分の水筒に入ったなけなしの水をいやな顔一つせずにくれたことも鮮明に思い出します(写真の一番後ろからはほえんでいるのが彼です)。また、今から10年前、彼のクリニックを尋ねていったことがあります。クリニック内を案内し説明も丁寧にしてくれました。私も開業を考えており、不安があった時期でしたので大変心強く思いました。諸行無常とはいいますが、それでも、やさしさにあふれ、頼りになる彼がこんなに早く遠い彼方へ旅だったなんて…信じられません。

最後に四宮へ……

四宮はいろいろなことを相談でき、優しく、頼りになる友人だった。あまり出しゃばらないところが好きだった。なのに足早に何も言わずに去っていった。研修

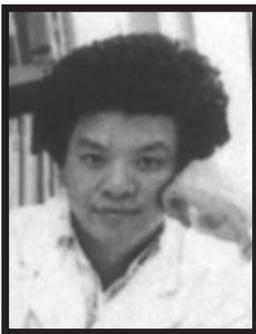


医〜助手という医師の基礎時代に一緒に働き、現在まで友人であったことは本当によかった。いろいろとありがとう。ほんとうにありがとう。これからも忘れない。…ただ、私の心の中にはポッカリとおおきな穴があいた。

どうか安らかにご永眠ください。心からご冥福をお祈りいたします。

富田祥夫先生を偲んで

つだこどもクリニック院長 津 田 恵次郎 (4回生)



福岡大学小児科同門の富田祥夫先生が平成26年8月31日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りします。

先生とは医学部が創設された1972年に入学し、長い学生生活をおくり一緒に卒業した仲です。父親同士が友人

であること、年が同じであること、学籍番号が近いことなどから自然と近い存在でした。教養課程では、先生は写真をはじめ趣味に夢中で、誘われれば断らない桜花した学生生活を過ごしていました。専門課程に入ると試験終了時や成績発表後にお互い顔を見合わせたものです。臨床実習も同じグループです。写真は卒業年度の小児科病棟で撮ったものです。カ

ンファレンスルームの机の上で肘をつくポーズは彼独特の雰囲気が出ています。温厚な性格で、自分からは強い主張はしません。ぶっきらぼうですが彼なりにグループの調和を崩さないように気をつけていました。写真を撮られるときは中央より端が多く、私も同様なので記念写真では気づくと彼の近くに立っていました。外見以上に性格はやさしく、病棟では子どもと笑いながら遊んでいる姿を思い出します。平成6年に富田クリニック(内科・小児科・理学診療科)を糸島で開院後は、同門会で近況を聞かされた時に、地域医療に頑張る姿を感じていたところでした。

祥夫先生、お疲れ様でした。先に開業医を卒業しましたね!これからは雲の上からゆっくと好きなだけ趣味を楽しんでください。

加藤清信先生を悼んで

福岡大学医学部 呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学 講師 平塚 昌文 (13 回生)

謹んで加藤清信先生のご霊前に福岡大学医学部第13期卒業生を代表して、お別れの言葉を捧げさせていただきます。この度先生のご逝去(平成26年11月4日)の訃報に同級生一同深い悲しみに沈んでいます。

私と加藤さんが、親しく話をするようになったのは、実は医学部後半5・6年の頃からです。臨床実習、医師国家試験を前に学習班が一緒になりその頃から親しく話すようになりました。加藤さんは自分より年上でしたが、いつも僕の事を“平塚くん”と呼び、話すときも基本敬語でした。逆に年下の私の方が、“ため口”で話すことも多々ありました。当時、とんねるずの、“ホモオ田ホモオ”がテレビで流行っており、加藤さんの優しい話し方と雰囲気は何となく似ていると言って盛り上がったっていました。

卒業後は、加藤さんは整形外科、自分は呼吸器外

科と別の分野に進み、全く会うことはありませんでした。久しぶりの再会は、数年前私たちの学年が福岡大学医学部同門会の幹事学年になりその打ち上げでの席でした。20数年ぶりの再会でしたが、学生時代同様、相変わらず、私の事を“平塚くん”と呼んでくれました。この年になると“君づけ”で名前を呼ばれる事などないので、一瞬で学生時代に戻った気がして非常に懐かしく思ったのを覚えています。その後、時々メールのやり取りをするようになりました。加藤さんはホークスファンで福岡ドームでの野球のチケットが取れた時は、“平塚くん、一緒に行きませんか?”と相変わらず丁寧な言葉使いでのお誘いのメールが来たりしていました。仕事の都合が中々合わず一緒に野球観戦に行けなかったのが今となっては残念でなりません。それから数年後 自分が加藤さんの追悼文を書くことになるとは夢にも思いませんでした。

矢野善一郎先生を偲んで

医療法人 二田哲博クリニック 理事長 二田 哲博 (9 回生)



平成26年11月15日矢野善一郎先生(9回生)が逝去されました。私は出張中で訃報に接することができず、お通夜とご葬儀に出席することが叶わなかったことが今も悔やまれます。ご葬儀の翌週に矢野内科胃腸科医院

に隣接するご自宅に伺い、お参りをさせて頂きました。

筑後の自然豊かな地に矢野内科胃腸科医院はあり

ました。第一駐車場から第三駐車場まである広い医院専用駐車場が日々多くの患者さんが矢野先生のもとを訪れていた事を物語っていました。誠実で優しい性格の矢野先生でしたから、地域の患者さんから慕われ信頼されていたことでしょう。出迎えて下さった奥様から、「生前、主人から二田先生のことをよく聞いていたので、初めてお会いするような気がしません。」とご挨拶され、遺影に手を合わせながら旧友との思い出を振り返っていました。矢野先生は、福岡大学医学部入学時に、周りに誰も知り合いがいなかった私に初めて出来た友人でした。周囲の友達が彼

を「善一郎」と呼んでいたのが、年下の私も生意気に「善一郎」と呼びましたが、嫌な顔もせず常に優しく接してくれました。名は体を表すと言いますが、善一郎という名前が示すように矢野先生は本当に善良な人間で皆から慕われていました。それから、私達は学生時代をずっと一緒に過ごし、その後二人とも第一内科に入局しました。研修医の二年間は内科をすべて回るのですが、矢野先生と私は同じグループとなり朝から夜中まで一緒に仕事をしながら苦楽を共に過ごしました。私達のグループはアクの強い人間が多く、たまにぶつかる事もあったのですが、矢野先生がみんなの緩衝役をしてくれたおかげで、最後まで無事に仲良く研修医生活を終えることが出来ました。その後は、矢野先生は消化器グループ、私は内分泌グループに入ったため一緒に仕事をする機会はありませ

んでしたが、当時の第一内科主任教授でいらした奥村恂先生の米寿の御祝会が昨年行われた際に、同期の皆が揃うということで、久しぶりに矢野先生に会える事を楽しみにしておりました。しかし、体調不良で欠席されたので心配になり電話したところ、「大丈夫、元気だよ。」と明るい声が返ってきました。お互いに近況を報告して一安心しましたが、それが矢野先生と言葉を交わした最後となりました。いつか時間ができたら同期で集まりゆっくり酒でも酌み交わしながら昔話でもしたいと常々思っておりましたが、矢野先生とはそれも出来なくなってしまいました。しかし、矢野先生という優しさに満ちた存在は沢山の思い出と共にこれからもご家族の皆様や周りの方々、そして私の胸に生き続けていく事と思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

故 日山 昇 君 (1 回生) 追悼の記 － わが友、日山昇君を偲んで －

福岡大学筑紫病院 外科 診療教授 二 見 喜太郎 (1 回生)

2015年3月14日、わがよき友、日山昇君が61歳の若さで旅立ちました。

原邦夫君、元永隆三君、深村俊和君、野田萬里君、そして日山昇君、63名の1回生のうち、5名が天に旅立ち、残りは58名になってしまいました。

日山君は現役で入学(学籍番号MM72-108)、1年時は野球部に所属していたのですが、親友の一人である甲斐保君の話によるとキャッチボールがうまく出来なかったようで、われわれのラグビー部に移ったのが2年の時でした。教養時代にはマージャンとラグビーとお酒に明け暮れていた私との縁は、下宿が近かったことに始まります。一人っ子だった彼には3年浪人の私を兄のように感じたのでしょうか、「喜太郎さん」とよく慕ってくれたこともあり、ラグビーに誘ったのです。ラグビーというスポーツは身体の大小に関係なく誰にでも出来るポジションがあるのが長所

の一つで、小柄ながら足は速かったのでウイングをやってもらうことになったのです。ルールもまだ分からない頃には、ボールを持ったらとにかく真っ直ぐ前に走れと声をかけながら、ラグビーを楽しんだことを昨



ラグビーの仲間とともに。
後列向かって右端に日山君、肩を組む二見

日のことのように思い出します。試合中に頭を打って「喜太郎さん、物が二重に見える」とフォワードの私のところまで駆け寄ってきた時には、「走れば治る」と気合を入れて試合を続けたこともありましたが、いつも笑顔を絶やさずそれは優しい性格だったので、ラグビーは不釣合いかと思っていたのですが、5年時まで多くの仲間とともにラグビーを楽しんでくれました。

卒業してからは実家のある広島大学の眼科に入局、その後研鑽を積み父上の跡を継いで開業の道に進んだのですが、30歳台半ばに脳出血(脳血管奇形)で倒れてしまったのです。ギョッとするようなCT所見だったのですが、ご家族の力も得て見事に立ち直り、診療にも復帰、同級会にも顔を出せるようになっておりました。5年程前でしょうか、今度は心筋梗塞に襲われてしまいました。これも克服してくれましたが、さすがに福岡へ来ることは難しくなり同級生一同心配していた所でした。そして突然の訃報、高木会

長から電話で知らされたのですが、「喜太郎、58人になってしまったぞ」とわめくような声で誰がどうなったか分からずにいたら、落ち着きを取り戻して「昇が亡くなった」と聞かされたのです。最後は糖尿病も患っており、透析中に穿孔性腹膜炎を発症して緊急手術の甲斐も無く手術室を出てそのまま息を引き取ったとお聞きしております。大難も3度目となるとさすがに抗し難かったのですが、優しい笑顔で苦難を乗り越えてまだまだ長生きして欲しかったと思うばかりです。天は酷いものです。旅立った同級生を顧みますと皆一様に優しさを思い出す仲間たちです。卒業して37年、新設医学部の1回生として苦楽を共にしただけに一人一人の人生が胸に染みます。日山昇君も力を振り絞って61年の生涯をしっかりと前を向いて生きたことは確かです。今はただあの優しい笑顔を想いながらご冥福をお祈りするだけです。

合 掌。

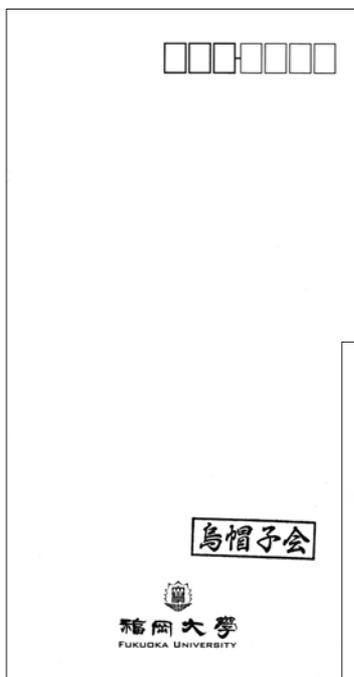
事務局だより

烏帽子会印判について

平成 27 年 3 月、福岡県内、佐賀県鳥栖市・唐津市・伊万里市の開業医、自家勤務の先生方へ、烏帽子会と福岡大学病院におきます病診連携事業の一環として、患者様ご紹介の際にお使い頂くべく作成しました「烏帽子会印」を送付させていただきました。

同封しました文書に「烏帽子会印」を押す場所の記載がなかったため、沢山の先生方よりお問い合わせがありました。写真のように封筒、紹介状の2カ所に押印していただきますようお願いいたします。

福岡大学医学部同窓会
事務局長 小山久美



医局長・医長名簿

(○内の数字は福大医学部卒業回)

平成 27 年 4 月現在

	医 局 長	病棟医長	外 来 医 長
[福 岡 大 学 病 院]			
腫瘍・血液・感染症内科	戸 川 温	猪 狩 洋 介 ㉓	後 藤 敏 孝
内 分 泌 ・ 糖 尿 病 内 科	田 邊 真 紀 人	村 瀬 邦 崇	元 永 綾 子 ㉗
循 環 器 内 科	三 浦 伸 一 郎 ⑪	志 賀 悠 平 ㉖	森 井 誠 士 ㉖
消 化 器 内 科	阿 南 章 ⑱	石 橋 英 樹 ㉓	横 山 圭 二 ㉒
呼 吸 器 内 科	石 井 寛	白 石 素 公 ⑪	廣 田 貴 子
腎 臓 ・ 膠 原 病 内 科	安 部 泰 弘 ㉑	三 宅 勝 久	伊 藤 建 二 ㉕
血液浄化療法センター		笹 富 佳 江 ⑬	
神 經 内 科 ・ 健 康 管 理 科	津 川 潤	深 江 治 郎	福 原 康 介 ㉖
精 神 神 經 科	田 中 謙 太 郎 ㉕	衛 藤 暢 明	黒 岩 健 輔 ㉓
〃 (ダイケア)			片 岡 岳
小 児 科	井 手 口 博 ⑱	吉 兼 由 佳 子 ⑱	井 手 康 二 ㉒
消 化 器 外 科	橋 本 竜 哉 ㉑	愛 洲 尚 哉	谷 村 修
呼 吸 器 ・ 乳 腺 内 分 泌 ・ 小 児 外 科	吉 田 康 浩 ㉒	濱 武 大 輔 ㉒	平 塚 昌 文 ⑬
整 形 外 科	前 山 彰 ㉕	木 山 貴 彦 ㉒	信 藤 真 理 ㉒
形 成 外 科	川 上 善 久	大 山 拓 人 ㉖	木 村 広 美
脳 神 經 外 科	野 中 将 ⑱	大 川 将 和	左 村 和 弘
心 臓 血 管 外 科	和 田 秀 一 ⑬	助 弘 雄 太	峰 松 紀 年
皮 膚 科	伊 藤 宏 太 郎 ㉖	大 賀 保 範	伊 原 穂 乃 香 ㉓
泌 尿 器 科	入 江 慎 一 郎 ⑰	宮 島 茂 郎 ㉒	古 屋 隆 三 郎 ㉓
産 婦 人 科	城 田 京 子	荒 木 陵 多 ㉓(産科)	近 藤 晴 彦
〃		阿 南 春 分 ㉓(婦人科)	
眼 科	梅 田 尚 靖 ⑱	外 尾 恒 一 ㉒	有 田 直 子 ⑮
耳 鼻 咽 喉 科	上 野 哲 子 ㉒	福 崎 勉 ㉒	樋 口 仁 美
放 射 線 科	高 良 真 一 ⑱	赤 井 智 春 ㉗	品 川 喜 紳
麻 酔 科	重 松 研 二 ㉑	平 田 和 彦 ⑫	平 田 和 彦 ⑫
歯 科 口 腔 外 科	瀬 戸 美 夏	大 谷 泰 志	喜 多 涼 介
病 理 部	溝 口 幹 朗 ⑥		
臨 床 検 査 部	松 本 直 通 ⑭		
輸 血 部	熊 川 み どり		
救 命 救 急 セ ン タ ー	西 田 武 司 ㉓	田 中 潤 一	
総 合 周 産 期 母 子 医 療 セ ン タ ー		太 田 栄 治 ⑱(新生児部門)	
〃		廣 瀬 龍 一 郎 (3階南病棟)	
総 合 診 療 部	武 岡 宏 明 ㉕	堀 端 謙	武 岡 宏 明 ㉕
東 洋 医 学 診 療 部	久 保 田 正 樹 ⑭		
[福 岡 大 学 筑 紫 病 院]			
筑 紫 病 院 (総 医 局 長)	宮 崎 浩 行 (呼吸器内科)		
循 環 器 内 科	光 武 良 晃 ㉕	岡 村 圭 祐 ㉒	熊 谷 尚 子 ㉖
内 分 泌 ・ 糖 尿 病 内 科	工 藤 忠 睦 ㉓	阿 部 一 朗	小 林 邦 久
呼 吸 器 内 科	宮 崎 浩 行	赤 木 隆 紀 ㉑	児 玉 多 ㉗
消 化 器 内 科 ・ 内 視 鏡 部	光 安 智 子	二 宮 風 夫 ㉖	石 原 裕 士 ㉗
小 児 科	森 島 直 美	山 崎 靖 人 ㉖	鶴 澤 礼 実
外 科	平 野 公 一 ㉑	平 野 由 紀 子 ㉓	三 宅 徹 ㉓
整 形 外 科	秋 吉 祐 一 郎	櫻 井 真 ㉗	黒 田 大 輔
脳 神 經 外 科	伊 香 稔	坂 本 王 哉 ㉓	新 居 浩 平 ㉒
泌 尿 器 科	平 浩 志 ⑮	平 浩 志 ⑮	宮 嶋 哲 匡 ⑱
眼 科	佐 々 由 季 生	佐 々 由 季 生	縄 田 信 彦
耳 鼻 い ん こ う 科	市 川 大 輔 ㉕	市 川 大 輔 ㉕	坂 田 俊 文 ⑩
放 射 線 科	山 本 良 太 郎 ㉒		
救 急 科	松 尾 邦 浩 ⑧		
麻 酔 科	生 野 慎 二 郎 ⑧		
病 理 部	原 岡 誠 司		

教育職員人事 (講師以上)

(○内の数字は福大医学部卒業回)

[平成 26.10.2 ~ 27.4.1]

区分	所属	資格	氏名	発令日	摘要
退職	病理学	教授	岩崎 宏	27.3.31	
	生化学	教授	黒木 政秀	27.3.31	
	腎臓・膠原病内科学	教授	斉藤 喬雄	27.3.31	
	スポーツ科学部	教授	清永 明 ①	27.3.31	
	筑紫救急科	准教授	村田 厚夫	27.3.31	
	精神神経科	講師	内田 直樹	27.3.31	
	放射線部(第1・第2)	講師	黒木 嘉典 ⑬	27.3.31	
	筑紫循環器内科	講師	東條 秀明 ⑰	27.3.31	
	衛生・公衆衛生学	講師	牛島 佳代	27.3.31	
	眼科学	講師	小沢 昌彦 ⑮	27.3.31	
	心臓・血管内科学	講師	福田 佑介	27.3.31	
	小児科学	講師	柳井 文男	27.3.31	
	精神神経科	講師	吉田 公輔	27.3.31	
筑紫消化器内科	講師	高木 靖寛 ⑮	27.3.31		
休職	精神医学	講師	松下 満彦	27.4.1	
	精神医学	教授	川 崙 弘 詔	27.4.1	
採用	生化学	教授	安永 晋一郎	27.4.1	
	衛生・公衆衛生学	講師	辻 雅 善	27.4.1	
	医学教育推進講座	講師	森原 大輔 ⑳	27.4.1	
	筑紫救急科	講師	衛藤 聡 ㉑	27.4.1	
	循環器内科	講師	西川 宏明 ⑱	27.4.1	
	脳神経外科	講師	勝田 俊郎	27.4.1	
	腫瘍・血液・感染症内科学	教授	高松 泰	27.4.1	
総合診療部	教授	鍋島 茂樹 ⑬	27.4.1		
筑紫内視鏡部	教授	八尾 健史	27.4.1		
卒後臨床研修センター	准教授	河村 彰 ⑰	27.4.1		
医学教育推進講座	講師	八尋 英二 ⑱	27.4.1		
脳神経外科学	講師	大川 将和	27.4.1		
皮膚科学	講師	柴山 慶継 ㉗	27.4.1		
病理学	講師	青木 光希子	27.4.1		
循環器内科	講師	池 周而 ㉔	27.4.1		
消化器外科	講師	橋本 竜哉 ㉑	27.4.1		
眼科学	講師	梅田 尚靖 ⑱	27.4.1		
耳鼻咽喉科	講師	樋口 仁美	27.4.1		
再生医療センター	講師	伊東 威 ㉒	27.4.1		
小児科	講師	野村 優子 ㉒	27.4.1		
消化器外科	講師	中村 伸理子	27.4.1		
救命救急センター	講師	平野 玄竜 ㉔	27.4.1		
筑紫循環器内科	講師	光武 良晃 ㉕	27.4.1		
筑紫消化器内科	講師	矢野 豊 ㉔	27.4.1		
筑紫救急科	講師	岡村 圭祐 ㉔	27.4.1		



TOP TEN Medical Students



Congratulations

2015.4.6 レ・セレブリテ



編集後記

戦後70年目の節目の年の同窓会春号を会員の皆様にお届けする。先日のニュースでも安倍晋三総理大臣がアメリカの上院下院合同議会で40分の講演を行った。日本の首相としては戦後4人目だそうだ。まだまだ日米安保協定ガイドライン成立にはいろんな問題が山積しているようだ。さて本同窓会誌(烏帽子会会報)も年2回の発行を重ね今回で第58号、2015年春号となる。早いものだ。

今回は医学部教授会に5名の新任教授をお迎えした。そのうち3名が医学部同窓会会員で有りなかでもお二人の教授は13回卒業生である。世代の移り変わりを感じずにはられない。また、会員の学会活動も賑やかで今回も多く、研究会を主催されそれぞれの分野で活躍されているのが見て取れる、嬉しい限りだ。

しかし訃報報告は今回も皆無では無く、ましてや若い会員の訃報が目につく、心からお悔やみ申し上げる。

また医学部同窓会の種々の取り組みの報告や各支部からの活動報告など会員の皆様には、今の福岡大学医学部同窓生(3900名以上)の活力を肌で感じていただけたと思う。医学部同窓会は創生期から成長期、成熟期に入った感がある。今後は会員の近況報告などを増やし会員相互の情報発信誌と成ることを期待したい。どうぞ今一層、会員の皆様の寄稿をお願いいたします。

福岡大学筑紫外科 前川 隆文 (2回生・広報担当理事)

烏帽子会会報第58号

発行日 平成27年5月15日
 発行人 高木 忠博
 編集人 小玉 正太

発行所 〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1
 福岡大学医学部同窓会
 電話:092-865-6353(直通)
 092-801-1011(代表) 内線[3032]
 FAX:092-865-9484
 E-mail:ebosehi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp

印刷所 ロータリー印刷(株)
 福岡市中央区長浜2-1-30
 電話:092-711-7741
 FAX:092-711-7901